補足資料

＜インド IT 業界の不況＞　オバマ政権の海外への影響

インドのシリコンバレーと呼ばれた街を今、不確実性という妖怪が徘徊している。

「先が見えない。史上最悪の事態だ」。バンガロールに本社がある IT 大手インフォシスの 09 年 1～3 月期決算は、ドル建て収入が前年同期比で 1.8%減少、年 20～30%の成長から一転、創業以来初のマイナスとなったため、ゴパラクリシュナン最高経営責任者（CEO）はいら立ちをあらわにした。最大の要因は、売り上げの 6 割を占める米国向けの低迷だ。金融機関などが IT 投資を減らしたあおりを食った。

「国内雇用を優先するオバマ米政権がアウトソーシングを減らす」との懸念が広がる。米国では 4 月に学資ローン最大手のサリー・メイ、デルタ航空がインドへの業務委託をやめると発表。JP モルガン・チェースもコールセンター業務を米国に戻すと伝えられる。

プログラム技術者サンパットさん（35）は 3 月、大手企業を「自主退社」した。夜 7 時から早朝までの仕事をさせられて体がもたず、配置換えを申し出たら上司に呼び出された。「1 週間以内に退社してほしい」

同じ境遇で解雇通知を受けた同僚を見て決意した。「解雇通知を受けたら、同じ業界で再就職できないのが慣習。受け入れるしかなかった」。住宅ローンを抱え、年老いた親から借金をしている。

05 年にできた IT 技術者のための労働組合「ユナイツ・プロフェッショナルズ」には相談が殺到している。「IT のような新興産業には労働者を守る組織がない。みなどうしたらいいか分からずにいる」とシェカール事務局長。

シェカールさんの推計ではこの半年間でインド全土で約 5 万人の IT 技術者が事実上、解雇された。「毎年 30 万人の雇用を生み出した IT 業界から、この 1 年で 20 万人が去るだろう」。最近、業界大手の人事担当者のコメントが新聞をにぎわせた。（朝日新聞、2009 年 5 月 2 日、9 面）

＜参考資料――部屋の壁を塗る＞　映画 *Juno* の子供部屋のシーンについて

“That’s what I thought at first. A joke. A sick joke. We gave up trying to have kids ten years ago. I’ve told you all about that. There isn’t a day goes by, even now, when I don’t think about the kids we could have had if things had worked out. I could have been a gran by now. But I thought Colin had forgotten all about it. You know he never was that bothered, not really, even when we were going up to the clinic every week. He was doing it for me really. But now it looks like something’s got to him… He’s started converting our spare room back into a nursery. We had it as a nursery when we were going for the treatment. Just hoping we could put a baby in it. Just to have the chance to muck around with baby things. When we finally called it a day we gutted the room. It broke my heart. We didn’t throw anything away, it was funny, but suddenly everyone we knew needed baby stuff. Most of it went to my sister – the clothes, the cot, the majority of the toys. We painted over the Tiggers with oatmeal, then I used the room for my china painting. You know me and my china. We never miss a craft fair. I had a little kiln in there and everything. But now he’s gone and painted new Tiggers on the walls. He’s splashed out on a posh cot with brass bits on. He says we have to have everything ready in time. It’s due in November.” (Gerard Woodward, “A Tray of Ice Cubes,” 4-5. http://www.theshortstory.org.uk/stories/index.php4?storyid=4)

異文化理解科目（英語）A　　第二週講義資料

オバマ現象に見る「古さ」と「新しさ」

＜授業のポイント＞

アメリカ合衆国第 44 代大統領バラク・オバマは、世界的な「現象」となっている。“Change”や“Yes, we can”などのキャッチフレーズで日本でも人気だが、オバマはなぜそれほどの注目を浴びるのだろうか。また、オバマ現象から見えてくる、現代社会の変化はどのようなものだろうか。

１．ディスカッション

・オバマのイメージとして思い浮かぶのはどのようなことか？

・大統領として、オバマはどのように新しいのか？

・オバマが大統領に選ばれることとなった大きな要因は何か？

２．アメリカ政治の伝統　（**資料１、資料２**）

・人種と政治――オバマは黒人の代表なのか

・伝統の継続――リンカーンを引き合いに出すのはなぜか

・ケーススタディー：Suzan Lori-Parks のリンカーン劇――アフリカ系アメリカ人女性劇作家 Parks の劇 *The America Play* では、黒人がリンカーンに扮して、リンカーン暗殺をショーとして見せる様が描かれる。リンカーンの持つ意味をどう変化させていくのかに着目したい。

３．ニューメディアと政治　（**資料３**）

・携帯電話による情報収集・ネットワーク構築

・YouTube をモデルにした選挙戦

４．コンピューターによるコミュニケーションの特徴　（**資料４**）

・Crystal の本から、第 24 章“How the Electronic Medium Differs”を読む――主にインターネットの言語的側面に着目したもの。各自熟読し、授業で音読・説明ができるようにしておく。

参考文献

Crystal, David. *How Language Works.* London: Penguin, 2006.

Michaels, Walter Benn. *The Trouble with Diversity: How We Learned to Love Identity and Ignore Inequality.* New York: Henry Holt, 2006.

Parks, Suzan-Lori. *The America Play and Other Works.* New York: Theatre Communications Group, 1995.

Stross, Randall. *Planet Google: One Company's Audacious Plan to Organize Everything We Know.* New York: Free Press, 2008.

杉田弘毅『アメリカはなぜ変われるのか』ちくま新書、2009 年

資料１

＜引用１＞　政治家としてどこが違うか

輝かしい経歴の一方で、シングルマザーに育てられ、貧しい黒人コミュニティでの仕事[1]を振り出しにすることから、富裕層も貧困層も親近感を持つ。

ハワイで生まれ育ち、インドネシアで幼年期をすごした経験から、アジア系もオバマに親しみを持つ。青年時代にケニアに自分探しの旅にでたオバマに、自分の自分探しを重ねるアメリカ人は多い。

「誰もが思い思いの絵を描ける真っ白なキャンバス[2]みたいなものだ」

オバマとは何かを探っているうちにこんな言葉を聞いた。

黒人でも白人でもあり、貧困もエリート社会も知る万華鏡のようなオバマゆえに、その「希望」「変革」のメッセージは、皮膚の色、各層を越えて人を惹きつける魅力を持つ。白人、ヒスパニック、黒人、アジア系など人種間結婚が当たり前となったアメリカを象徴する初めてのリーダーだ。(……)

アメリカの新世代の黒人政治家を追う黒人ジャーナリストのグエン・イフェルは「新世代の黒人政治家は、公民権運動を出発点とするこれまでの黒人政治家とは明らかに異質。公民権運動黒人政治家世代を超越している」と言う。新世代は怒りをたきつける旧来の黒人政治の手法[3]をとらない。黒人の憎悪を後ろ盾にする限り白人の票をとれないし、白人の票をとれなければ、主要ポストに当選できない。これまで黒人政治家は結局、人種カードに頼る「非主流」の政治家だったが、新世代は「主流」の政治家になろうとしている。(杉田　46-48)

註１　アルゲルド・ガーデンのこと。

アメリカの黒人は平均すると、年収が全人種平均の 3 分の 2 程度だ。全米では 10 人に 1 人が貧困層だが、黒人は 4 人に 1 人。失業率は全人種平均の二倍との統計もある。離婚などで父親がいない家庭も黒人は 30%と、アメリカ平均の 13%を大きく上回る。教育水準も白人平均は大学卒以上が 30%であるのに対して、黒人は 17%、貧困脱出は難しい。そんな黒人の生活水準に比べても、アルトゲルド・ガーデンは極端に悪い。(杉田　24-25)

Altgeld Gardens is a housing project located on the south side of Chicago, Illinois, USA. The residents are 97% African American according to the 2000 US Census. . . . It was built to satisfy the need for African American veterans returning from World War II and was originally owned by the federal government, but was granted to the Chicago Housing Authority in 1956. . . . As one of the first public housing developments ever built in the United States, it is considered an historical landmark. (http://en.wikipedia.org/wiki/Altgeld_Gardens,_Chicago)

シカゴの南部は地域コミュニティー崩壊と再生のモデルとしてしばしば言及される。Stewart Dybek の小説は、シカゴの北と南の違いを生々しく描いていて、一読の価値あり。

註２　アメリカを語る際に、しばしば“tabula rasa”という言葉が用いられる。文字を書き込む板の表面をこすって文字を消し、まっさらな状態にしたものを指す。アメリカの独立に影響を与えたイギリスの思想家 John Locke は、汚されていない心、純粋なままで残るものを指してこの言葉を使った。アメリカそのものが一種の「タブラ・ラサ」として想像されたのであり、またアメリカ人は常

に新たに生まれ変わってやり直すことができるという考えも、こうした理念に基づいている。

註３　これはいわゆるアイデンティティの政治（“identity politics”）あるいは少数派の政治（“minority politics”）のことで、人種などの違いをもとにして権利を要求し、政治的な力を獲得しようとするもの。アイデンティティの政治にも問題がないわけではない。

To some extent. . . *culture* is now being used as a virtual synonym for *racial identity* (the *multi* in *multiculturalism* has nothing to do with some people liking Mozart and other people liking the Strokes), and to some extent it's also being used as a replacement for racial identity. When, for example, the alternative to Mozart is John Coltrane and the alternative to the Strokes is Jay-Z, we are more inclined to count these differences as cultural and to characterize them as the differences between a white culture and a black one. And the point of invoking culture here is precisely to make it clear that we are not talking about the biological differences that we used wrongly to associate with race. In fact, the modern notion of culture—we might call it the anthropological notion of culture—was essentially invented as an alternative to race. Its core idea was that the significant differences between groups—differences in the way they thought and acted—were cultural *instead of* biological. So when we talk about black or white or Jewish or Native American culture, we're talking about differences in what people do and believe, not about differences in blood. (Michaels 40-41)

つまり、「文化」ということで、人種の問題を回避できるという風潮があるということだ。マイケルずが言うのは、人種の違いは絶対だということではなく、「いろいろな文化があっても良い」という建前のせいで、人種の違いによる格差のような問題が見えなくなっているということである。

＜引用２＞　人種混交の恐怖

人種間結婚禁止の歴史は 17 世紀、入植開始と同時に始まる。急速に拡大したアメリカ南部の農業生産を奴隷が支えたミシシッピ州では奴隷の方が白人より人口が多かったくらいだから、奴隷所有者の白人と黒人奴隷との間で性的な関係が生じる[4] こともあっただろうし、愛し合い、結婚しようとするカップルが当然多数出ただろう。

しかし、各州の法は、宗教的な純血主義や、白人人種は優秀であり人種混合は劣等な人間を生みだすという人種優生学などを根拠として、人種間結婚を禁じた。しかし、白人男性と黒人女性の関係については見過ごされていたという。異人種である黒人に白人女性を奪われる嫌悪感を白人男性が抱き、また黒人の持つ肉体的な強さから白人女性を守りたいという白人男性が抱く心理的コンプレックスもあった。裕福な白人層は、貧困白人層と黒人が結託して、挑戦してくるという悪夢[5] を抱いたとも言われる。

黒人の定義については「黒人の血が 4 分の 1」「8 分の 1」「16 分の 1」などさまざまだったが、バージニア州では 1930 年に、とうとう「黒人の血が一滴でも入れば、黒人」と規定する法[6] ができた。（杉田　37-38）

註４　有名なのは、独立宣言の起草者で第三代大統領となった Thomas Jefferson である。彼は、自分が所有する奴隷の Sally Hemings と性的な関係を持ち、二人の間には子供もできたと言われる。最近になって子孫の DNA 鑑定が行われ、この噂が証明されたとのニュースが流れた。Steve Erickson

の小説 *Arc d' X* をはじめ、Jefferson と Hemings の関係を題材にした作品も多く作られた。

註５　裕福な白人が郊外にゲートで囲まれた町を作って移り住み、都市の中心部が荒廃してスラム化してきた経緯には、このような心理的背景がある。また、社会問題となっている銃も、もともとは先住民から身を守るための、後には黒人から身を守るための自衛手段としてアメリカ社会に普及してきた。（マイケル・ムーアの映画『ボウリング・フォー・コロンバイン』他を参照のこと）

註６　英語では“one drop rule”と呼ばれる。人種差別では外見上の肌の色が大きな要因となるが、「血」という内面の要素もしばしば取りざたされてきた。特に、血が混じることが「汚染される」というメタファーで語られ、それが白人の恐怖を引き起こした。

＜引用３＞　人種差別と政治

白人と黒人の混血であるオバマ。かつてアメリカでは人種間結婚は忌み嫌われた。（……）17 世紀から 18 世紀にかけてアフリカからの奴隷の数は 1000 万人を数えた。こうしてアメリカに渡り、アメリカの産業発展に奴隷として貢献した黒人たちだが、アメリカの憲法は黒人奴隷を「5 分の 3」と数えると規定した（この規定は、1868 年の憲法修正 14 条でようやく正された）。

「5 分の 3」とは、各州の人口によって下院議員の定数が割り当てられる制度のため、奴隷の多い南部に多数の議員が配分されてしまうことに、北部の州が反発したためだ。だが、背景には黒人奴隷に対する平等な権利の付与を認めたくない白人の共通した思いがあった。

南北戦争中のリンカーンの奴隷解放宣言（1863 年）は、奴隷労働に経済的基盤を頼った南部も含めて、黒人奴隷を「解放」する。しかし、その後も黒人は南部でジム・クロウ[7]と呼ばれた徹底した隔離制度の対象となった。そもそもリンカーンの奴隷解放も、南北戦争の戦況を好転させるため、道徳性を強調して欧州諸国を北軍の味方につけ、また解放奴隷が北軍にはせ参じて兵力を増強できる、といった軍事的思惑が強かった。リンカーンも最初は奴隷を解放し、アメリカ国外に移住させるという「隔離」論者[8]で、人種間融和を望んだわけではなかった。（杉田　33-34）

註７　ジム・クロウ（Jim Crow）という法律があったのではなく、学校・病院・交通機関などの利用を制限する一連の差別的制度の総称としてこの名が用いられる。

註８　African American という名称が問題なのは、「アメリカ人」であることが前提とされているからである。歴史的に見れば、黒人をアフリカへ送り返そうとする運動もあり、また逆に黒人が自らアフリカ（またはその文化）へ回帰しようとする動きもあった。アメリカでは奇異に感じられる名前を名乗ったりするのも、アメリカ以外への帰属意識の表明となることがある。

＜引用４＞　リンカーンの系譜

1863 年に奴隷解放を宣言したリンカーンこそ、黒人大統領誕生への出発点と言える。公民権運動のキング牧師が 100 年後に「私には夢がある」と人種差別克服を訴えたのもこの［ワシントンにあるリンカーン］記念堂だ。

さらに 40 年強を経て、オバマは 2007 年 2 月、大統領選出馬宣言をリンカーンが本拠地としたイリノイ州スプリングフィールドで行い、08 年 11 月 4 日の大統領選当選演説では歴代大統領の中でリンカーンにだけ触れた。09 年 1 月 20 日の就任式ではリンカーンが使った聖書に左手を置いて宣言した。愛読

書はリンカーンの演説集というオバマは、「リンカーンがいなければ、私の人生は不可能だった」と言い、リンカーンを歴代大統領の中でもっとも尊敬している。(……)

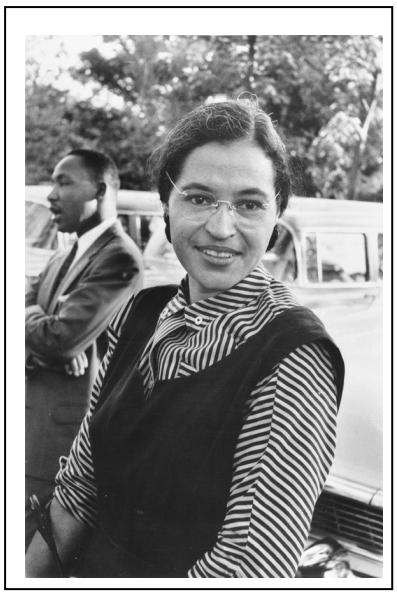
リンカーン記念堂には平日の午後というのにオバマとリンカーンの結び付き[9]を確認しようとしてか、たくさんの人々がいた。(……)

「ローザ・パークスが座り、マーチン（キング牧師）が歩き、オバマが走った（選挙出馬英語で run＝走ると言う)。そしてわれわれの子供たちは飛び立てる」。[10] こんな短いテキストメッセージが投票日直前にアメリカの黒人たちの間で流れた。長い闘いに勝った全米の黒人たち誇りと喜びが一つひとつの文字に感じられた。

オバマは自らをどこまで「黒人」と意識しているのかは分からない。しかし、黒人たちは、自分たちの代表が初めてアメリカのトップに立ったと歓喜しているのだ。(杉田　40-43)

註９　引用にもあるように、オバマはしばしばリンカーンと自分を重ね合わせることで、偉大な大統領のイメージを自分のイメージ作りに活用してきた。過去の大統領やその他の偉人の演説を引用してスピーチを行うのは、アメリカをはじめとして西洋の伝統となっている。例えば、リンカーンは独立宣言に言及し、キング牧師はリンカーンに言及して、それぞれ歴史的なスピーチを行った。

註 10　原語では“Rosa sat so Martin could walk, so Obama could run, so our children can fly”である。



Parks sat:

On December 1, 1955 in Montgomery, Alabama, Parks, age 42, refused to obey bus driver James Blake's order that she give up her seat to make room for a white passenger. . . . Parks's action sparked the Montgomery Bus Boycott. . . . Parks's act of defiance became an important symbol of the modern Civil Rights Movement and Parks became an international icon of resistance to racial segregation. She organized and collaborated with civil rights leaders, including boycott leader Martin Luther King, Jr., helping to launch him to national prominence in the civil rights movement. (http://en.wikipedia.org/wiki/Rosa_Parks)

Martin could walk:

The March on Washington for Jobs and Freedom was a large political rally that took place in Washington, D.C. on August 28, 1963. Martin Luther King, Jr. delivered his historic "I Have a Dream" speech advocating racial harmony at the Lincoln Memorial during the march. . . . Estimates of the number of participants varied from 200,000 (police) to over 300,000 (leaders of the march). About 80% of the marches were African American and 20% white and other ethnic groups. (http://en.wikipedia.org/wiki/March_on_Washington_for_Jobs_and_Freedom)

ちなみにテキストメッセージとは携帯電話のショートメールサービスのこと。アメリカやイギリスでは、“TEXT. . . to . . .”という広告をよく見かける。

＜引用５＞　オバマを支持する世代

ミレニアム世代[11]のもう一つの特徴は多様性だ。今、アメリカのどの大学を訪れても、「この子は何系だろう。白人なのかヒスパニックか、それともアジア系？」と人種・民族の色分けが簡単に想像できない学生がたくさんいるのに驚かされる。髪はブロンド、肌は茶色、話す英語にはなまりがあるといった、いろいろな血が混ざっている若者たちだ。白人が主流のアメリカの形が徐々に変わっていっているのが、よく分かる。

ハーバード大政治研究所の調査では若者の間で白人は 62%、続いてヒスパニック 17%、黒人 14%、アジア系 3%となっている。18 歳以下の子供たちで言えば、白人は 59%に減る。アメリカ全体では白人はまだ七割弱だが、若い世代の非白人化は将来の「アメリカの姿」を容易に予想させる。

旅行・滞在など外国経験があるのは 59%。アメリカの議員の 3 分の 2 はパスポートを持っていないと言われるが、この世代はグローバル化している。また、20%は両親のどちらかが移民だ。

こんなミレニアム世代は異人種、異質なものに対して寛容だ。というか大人の世代に比べて「異質」と思わないのだろう。（杉田　92）

註 11　1980 年代以降に生まれた世代。社会問題への関心が深く、積極的にボランティアに参加する。その一方で、甘やかされて育ち、わがままな振る舞いが目立つ。通信ネットワークを通した人とのつながりを重視し、新しいメディアを自在に操ることができる。

資料３

＜引用 10＞　画期的な有権者データ管理術

「62262 へ自分の郵便番号をつけてメッセージを送って」

2008 年 8 月 8 日、デンバーの民主党大会最終日、オバマの党候補指名受諾演説の直前に、司会者が壇上に上がり、8 万人の聴衆にこう呼びかけた。

「おっ、またやるのか」と会場から観覧席を見上げると、フットボール球場にひしめいていた聴衆がそれぞれ携帯電話を取り出し、62262 と番号を押して自分の郵便番号をメッセージとともに送った。オバマの大規模集会で必ず繰り広げられる儀式だ。

アメリカの電話にはそれぞれの番号のキーにアルファベットの文字も表示されており、62262 は OBAMA と打ち込むことにもなる。こうしてオバマ選対は膨大な量の支持者の名前と携帯番号と郵便番号を入手し、データベース化して、地域ごとの集会参加やボランティア、献金を勧誘するテキストメッセージを直接、送れるわけだ。

オバマから毎日のように筆者に届いた「親愛なるヒロキ（筆者のファーストネーム)」で始まり、「バラク（オバマのファーストネーム）より」で終わる友達からのメッセージのような携帯メールはこうして出来上がった。オバマ選対は 1300 万人のメールアドレスを持っていたという。

この携帯メールメッセージはオバマ選対の専売特許だ。2007 年 12 月にオバマがサウスカロライナ州で開いた集会で初めて、「62262」を呼びかけた時、大多数の政治のプロは何のことだか分からなかった。だが、少数のニューメディア専門家たちは、新人類の選挙屋たちが新しい技術を持ってまさに誕生し、そして 2008 年大統領選挙の力学を変えることを予想した。

翌年 1 月、オバマはアメリカ中が注視するプロフットボールの花形ゲーム、スーパーボウルの中継にテレビ広告を流し、その中で「62262 に HOPE のテキストを送れ」とメッセージをさらりと流したのだ。「面白い実験をやるな」。ニューメディア専門家たちはこうため息をもらした。（杉田 180-181）

＜ポイント解説＞

いかにして有権者の膨大かつ詳細な情報を手に入れるかが、選挙の勝敗を分ける。携帯メールを利用したオバマ陣営の戦略にはどのような利点があるだろうか。

１）費用（郵送・印刷など）がかからず、データを電子化する手間（人件費）も省ける。

２）個々の有権者ごとカスタマイズした、きめ細かな対応がしやすくなる。

３）候補者との親密なつながりがあると感じさせることができる。

４）儀式的な演出で、それぞれの参加者に自分も大きな流れの一部として貢献していると実感させる。

アメリカ史を振り返ると、電信を活用し自分の演説を全国に配布したリンカーン、ラジオ番組でリスナーに語りかけたフランクリン・ルーズベルト、テレビ映りを重視しメークアップに余念がなかったジョン・F・ケネディなど、大統領たちは時代ごとの新しいメディアを最大限に活用することで、国民の支持を得てきたことが分かる。オバマもまた例外ではないが、彼の場合は、新しいメディアを宣伝のために使うだけでなく、有権者参加型の政治を実現するための手段として活用した点が新しいといえる。

＜引用 11＞　YouTube 選挙

今回のユーチューブ選挙の画期的な点は、支持者がビデオカメラとコンピューター、映像編集用のソフトを使って、次々と勝手に応援ビデオをつくり、それがヒット作となり、回覧され、候補者を大きく側面支援したことにある。（杉田　167）

デベリはアパートで日曜日の午後、マックを使ってこのビデオを一人でつくり、ユーチューブにアップしたという。勤務先の会社はオバマ選対の仕事も請け負っているが、このビデオはオバマとは無関係に一人でつくったという。

デベリは「犯行宣言」をその後発表し、オバマが新しい政治を代弁し、クリントンの言う有権者との「会話」は偽物であることを示したかったと述べ、さらに「普通の市民がビデオをつくることで選挙に影響力を持つことを証明したかった」とその理由を説明した。実際、クリントンのトップダウン・監視型のイメージ、オバマの草の根に基盤をおく「変革」の旗手のイメージはこのビデオが最初に定着させた。

デベリは犯行宣言で不気味なことを予告した。「さらに多くの人々がこうしたビデオをつくるだろう。アメリカ政治の将来は普通の市民の手に握られている。ゲームのルールは変わったのだ」。

デベリの予告はそのとおりになった。（杉田　168-169）

＜ポイント解説＞

CNN で候補者の討論会を観ていると、YouTube が活用されていたのが印象的だった。候補者同士が話をするだけではなく、有権者がビデオメッセージを送ってきて、それが会場の大型スクリーンに流される。CNN も最近は YouTube を大々的に用いた報道を行っており、政治家や放送メディアが一方的に情報を送りつけるという「トップダウン」型から、有権者や視聴者一人ひとりが情報を発信していく「ボトムアップ」型へと、「ゲームのルール」が変わっていることが分かる。YouTube や Wikipedia に代表される新しい利用者参加型メディアの特性ゆえに、それを選挙に活用するということは、単に目新しいメディアを使ってみたということ以上の意味を持つ。新しいメディアの登場で、斬新な政治の運営が可能になったのである。次の引用で、YouTube 誕生の経緯を振り返っておきたい。また、オバマ陣営の公認ではなく、一般の支援者やオバマに賛同するアーティストが勝手に宣伝活動をやった点も重要である（上の画像はその一例）。

Shepherd Fairy 作成のポスター

ちなみに、デベリの作ったビデオは今も YouTube で観ることができる。そこで言及されている“1984”とは、George Orwell の小説 *1984*（1949 年出版）のことで、これは、スターリン体制のソ連における全体主義や戦後に社会主義路線を進もうとしていたイギリス社会を告発する、反ユートピア小説である。インターネットで使われる独特の言葉のことを“Netspeak”と呼ぶが（資料４参照）、*1984* には Newspeak という奇妙な言語が登場する。国民から批判的な思考力を奪うために政府が作り出した Newspeak では、例えば“Bad”という言葉はなくなり、“Ungood”という単語で代用される。小説では Big Brother と呼

ばれる人物が街中のモニターを通して人々を監視している。デベリのビデオでは、ヒラリー・クリントンがあたかも Big Brother であるかの様に描かれている。一種のネガティヴ・キャンペーンである。クリントンに象徴される古い体制、抑圧的な政治システムを打破する者としてのオバマのイメージが、このビデオによって強調された。

＜引用 12＞　YouTube の誕生

The original idea for YouTube is traceable to a moment of serendipitous discovery, in December 2004, when [25-year-old software engineer Jawad] Karim came across a stray statistic that caught his eye. In *Wired* magazine he read an article about BitTorrent, a software technology that allows fast transfer of very large files. The trick is that it uses peer-to-peer networking. BitTorrent, for example, was the technology that enabled the viral spread of a now infamous Jon Stewart television appearance. In the fall of 2004, Stewart appeared on CNN's *Crossfire* and astringently critiqued his hosts, Paul Begala and Tucker Carlson. He called their work "partisan hackery" and singled out Carlson as "a dick." A clip posted online caromed around the Web. In a few weeks it was viewed by 2.3 million people, passed along through BitTorrent. The fact that jumped out at Karim in the *Wired* article was that the Stewart clip had been seen online by at least three times as many people as had originally watched Stewart on CNN.

The Stewart clip was not the first one to enjoy such wide circulation; the emergence of clip culture had actually begun with the sharing of the much-discussed clip of Janet Jackson's "wardrobe malfunction" during the Superbowl earlier that year. But with the clip of Stewart on *Crossfire*, the velocity of viral sharing between PCs had sped up. Soon, the diversity of types of video that people might want to share in large numbers would become clearer. Shortly after the article in *Wired* appeared, the 2004 Indian Ocean tsunami struck. CNN camera crews were not present to capture the tragedy, and it became the first large-scale disaster chronicled primarily by cell phone camcorders.

Karim perceived that viewers who attempted to watch these virally spread videos ran into all sorts of technical difficulties, and he figured that a site that made uploading and watching any video effortless would fill an unmet need. (Stross 113-114)

＜ポイント解説＞

引用文中、繰り返し"viral"（ウィルスの）という形容詞が用いられている。YouTube によって拡がっていくビデオ共有ネットワークは、管理者にもコントロールできないものであることをよく示している。従来は文字情報の検索で成功した Google にも、ウェブ上に散らばった映像を検索するのは難しかった。その一方で、映像を探し出して自由に使いたいというユーザーの要望は高まっており、何らかのシステムの構築が急がれていた。まずシステムありきではなく、現実に起きている映像データ共有の動きに反応する形で新しいサービスが開発されたのである。YouTube を政治に活用する場合も、政治を政治家任せにはしておけないというアメリカの現状が先にあり、新たなメディアは、変化する有権者の要求にこたえるものだったと言うことができる。

異文化理解科目（英語）A　　第三週講義資料

映画とアメリカン・コミュニティ

＜授業のポイント＞

私たちが「アメリカ文化」として認識しているものの多くは、大衆娯楽を通して伝えられてきた。テレビのドラマや映画は、その代表である。お笑いの「ディランとキャサリン」が人気を博すことからも分かるように、吹き替えでアメリカのドラマを楽しむことが日本の文化として定着している。基本的に私たちは何らかの「翻訳」を経たものとして、それらの娯楽作品を楽しんでいるが、その過程で失われてしまうものもある。例えば「笑い」がそうで、アメリカのコメディを観ていても何がおかしいのか分からないことがしばしばある。しかし実はその失われてしまう部分にこそ、異文化理解の鍵があるといえる。今回は、娯楽作品に秘められたアメリカ文化の諸相を読み取りながら、アメリカの「コミュニティ」について考えてみたい。

１．地域性とエスニシティ　（資料１）

・映画やドラマを観る際に注意したい「地域性」

・エスニック・コミュニティという閉じられた世界

２．アメリカの郊外　（資料２）

・ケース・スタディ１：映画『ジュノ』（*Juno*, 2007）を観る――理想化された郊外生活

・拡大し多様化するアメリカの郊外

・ケース・スタディ２：映画『ステップフォード・ワイフ』（*The Stepford Wives*, 2004）を観る――Ira Levin の同名小説の映画化。1975 年にも映画化されている。男にとって理想的な妻ばかりが住む町を舞台にした風刺コメディ。アメリカの郊外生活を悪夢的に描いている。

・郊外・ハイウェイ・ショッピングモール――車社会アメリカの風景

３．Michel Gondry と The *Be Kind Rewind* Protocol　（資料３）

・ケース・スタディ３：フランス出身の映像作家 Michel Gondry の映画『僕らのミライへ逆回転』（*Be Kind Rewind*, 2008）を観る――過去の映画を勝手に自作自演でリメイクするなかで、街に一体感が生まれる様子を描いている。

・The *Be Kind Rewind* Protocol――映画の経験を現実社会で再現しようとする試み

参考文献

Berman, Morris. *Dark Ages America: The Final Phase of Empire.* New York: Norton, 2006.

Bryson, Bill. *The Lost Continent: Travels in Small-Town America.* 1989. London: Black Swan, 1999.

Gondry, Michel. *You'll Like This Movie Because You're in It: The* Be Kind Rewind *Protocol.* Brooklyn, NY: PictureBox, 2008.

渡辺将人『見えないアメリカ――保守とリベラルのあいだ』講談社現代新書、2008 年

資料１

＜引用１＞　舞台設定に見る地域のイメージ

政治映画というジャンルがある。オリバー・ストーン監督の一連の作品『ニクソン』（1995 年）『JFK』（1991 年）のほか、マイケル・ムーアの風刺シリーズも有名だ。またアメリカのアクション映画で一定の需要がある分野に「軍事」や「スパイ」を扱った作品群もある。トム・クランシー原作の映画化作品など代表例だろう。しかし、アメリカの映画やドラマに込められた「政治性」の面白さは、こうしたわかりやすい「政治映画」ではなく、一見して政治とまるで無関係な、コメディやラブロマンスなどの一般娯楽作品のなかに秘められている。

たとえばアメリカには、観客の笑い声を意図的に入れた、舞台喜劇のテレビ版のようなシチュエーション・コメディというジャンル(1)がある。そのなかのひとつに、1980 年代末からシーズンを重ねた『フルハウス』という長寿番組があった。日本でも NHK で吹き替え放送されたので、馴染みがある人も多いだろう。男手一つで娘三人を育てるという父子家庭の家に、友人のジョーイと義理の兄弟のジェシーおじさんが住みこむ、という心温まる心温まる喜劇だ。

しかし、父親のダニー役のボブ・サゲットは、番組について次のようなトゲのあるジョークを飛ばしたことがある。

「自分が演じたダニー役はゲイなのだろうとずっと思っていた。サンフランシスコに男二人と一緒に住んで、デートもろくにしないのだから」

もちろん、ダニー役は同性愛者の設定ではない。しかし、サゲットのこのようなジョークがアメリカ人をおおいに喜ばす背景に、『フルハウス』のアメリカ社会での認識のされ方が隠されているのも事実である。

それは『フルハウス』の舞台設定がサンフランシスコであることに、なにより起因する。いい年した男三人が一つ屋根の下、幼い女の子三人を一緒に育てる。これはどうみても保守的な伝統的家庭の形態への挑戦といっていい型破りなものであった。ここでサンフランシスコは「同性愛者の街」「性革命」のシンボルとしての暗喩をもたされている。

1990 年代半ばから放送された『フレンズ』も政治的な挑発に満ちていた。六人の若者のマンハッタン生活を描いた群像劇である。再放送も含めて番組の人気が絶頂だった 1998 年、アメリカのテレビ広告界で大スポンサーとして影響をふるっていたジョンソン＆ジョンソン社の広告担当副社長アンドレア・アルストラップが、ニューヨーク女性広告会議の基調講演で次のような批判を展開した。

「未婚の若い女性が、義理の妹が妊娠できないからといって、弟の子供を代理母として出産するエピソードがある」

問題になったキャラクターは、リサ・クドロー演じるフィービーのことで、異母兄弟の代理母として妊娠するストーリーが盛り込まれていた。フィービーは保守的な性道徳にとらわれない、リベラルな 1990 年代版ヒッピーという設定だった。保守的な視聴者(2)に気をつかったスポンサーは、地上波の夜八時台に流すものではないと論争を巻き起こした。

しかし、保守派の批判をかわしながら、NBC 放送は打ち切りや大幅な台本の書き換えには応じなかった。高視聴率に加えてうしろ盾になっていたのは「どうせマンハッタンのジェネレーション X(3)の話ですから」という口実だった。マンハッタンのアパートで暮らす 1960 年代後半生まれのリベラルな若者たち

というメタファーが、番組を結果的に保守派の攻撃から守った。たしかに、敬虔なキリスト教徒や農村の保守的な一家のくらしを茶化しているわけではない。あくまで「マンハッタンの価値観」に限定されたコメディだ。

前妻がレズビアンだったロスは、妹モニカともどもユダヤ系という設定であるが、性的にも奔放である。イタリア系のジョーイの祖母には、英語で会話できないイタリア系ゲットー出身の南欧移民一世のステレオタイプがあてはめられている。ジョーイのルームメイトの男性友人役のチャンドラーは、父親がゲイという設定。1990 年代のアメリカの「リベラル」の生活の一端を、同性愛や自由な性をめぐって、どこまで大げさに描けるかが狙いの一つだった。

だからこそ『フレンズ』は、マンハッタンが舞台でなければならなかった。神経質なユダヤ系研究者と、お気楽なイタリア系の売れない役者という、強引なエスニック対比も、この街が舞台なら差別的にみえない。

映像の世界よりもよほど現実のほうが多様性に富んでいるマンハッタンは、パロディの対象の宝庫だ。1984 年に大ヒットしたビル・マーレー主演の映画『ゴースト・バスターズ』は、アイバン・ライトマン監督が述べているように、ボストンやサンフランシスコを舞台にしても意味がなかった。ニューヨークのローカル色をコメディ化することを意図した、「ニューヨーク映画」として製作された。

ユダヤ教のラビ（宗教的指導者）とカトリックの神父が、隣でお互いのことを気にもせず、誰も聴いていない祈りを延々と捧げるシーンがある。こうしたニューヨーク的な「異種スクラップ」をこの映画ではこれでもかと誇張して描く。30 センチ向こうの高層アパートの隣人とすらコミュニケーションがない「個が分断された多様性」の街なのに、なにかお祭りごとがあるときだけ「おれたちニューヨーカー」という意識で結束したがる。お祭りごととはこのコメディ映画では「幽霊退治」のことである。核物質を違法に用いた機材をつかう「幽霊退治」も、タブロイド・メディアと住人が、自分たちで騒ぎを生産して消費する「祭り」のサイクルとしてしか描かれていない。ニューヨークだからだ。（渡辺　26-30）

註１　シットコム（sitcom）と略すことが多い。観客の笑い声は録音されたものを流すので、「缶詰めの笑い声」（canned laughter）と呼ばれる。

註２　特に宗教的な道徳観が根強く、性に関するタブーや、妊娠中絶・人工授精への反発は時に殺人事件にまで発展することがある。

註３　ベビーブームが終わって、第二次ベビーブームが来るまでの間に生まれた世代。定義には諸説あるが、世代人口の少なさと、世代としての特徴のなさが特徴。Douglas Coupland の小説 *Generation X: Tales for an Accelerated Culture* (1991)が話題になったこともあり、一時期は日本でもこの用語が盛んに使われた。

＜ポイント解説＞

アメリカの大衆文化を理解するためには、コメディというジャンルを注意深く見てみるとよい。『オズの魔法使い』の例でも見たように、特定の地域が持つ意味を笑いに変える際には、もともと皆が抱いているその地域のイメージに訴えかけることが多い。同じことは、人種や民族、言語、性といったきわどいテーマで笑いを生む場合にも当てはまる。映画などであるコミュニティの生活を面白おかしく描くことも、一種の「祭り」なのであり、それを通してコミュニティの存在を再確認するのである。

＜引用２＞　エスニック・コミュニティの閉鎖性

アメリカ社会でアジア系を本格的に目に見える存在にさせたのは、1965 年の移民法の改正である。それまでヨーロッパ系に偏っていた割当制度が改正された。中国系は女性の移民が多くなり、カリフォルニアとニューヨークのチャイナタウンに住み着いた。韓国系はロサンゼルスのコリアンタウンを大規模化した。こうしたエスニック・コミュニティ(4)は、ヨーロッパ系のゲットー(5)とおなじ相互扶助的な役割をもっていた。英語のできない新しい移民がアメリカ社会で生活していくうえでは、エスニック・コミュニティが欠かせなかった。

コミュニティの特有の事業があるのもアメリカの移民社会の特徴である。都市部で日系のオーナーが営んでいたクリーニング業のほか、かつてはイタリア系やギリシャ系の経営が多かった青果店や雑貨店も韓国系が受け継ぐようになった。これがさらに世代が進み、2000 年代にもなるとマンハッタンのデリカテッセンで、韓国系の経営者のもとでヒスパニック系の従業員が深夜勤務を強いられる、というマイノリティ同士の労使関係がうまれている。

都市のエスニック・コミュニティのなかにさえいれば、日銭を稼ぐ低賃金の仕事にはありつけたし、英語がブロークンでも、食から習慣まで自国の文化のままで生活できる。英語なしでもコミュニティの情報や世の中のおおまかなことが把握できるように、エスニックメディアが発達した。アメリカの大都市のエスニックメディアは、伝統的には、外に向けてその集団の文化をアピールするための広報的な機能をもつものではなく、あくまでコミュニティの内側にいるものたちにむけ、自分たちだけの言語で、自分たちに必要な情報を共有しあう自己完結的な媒体である。(……)

英語ができる二世以上の多いコミュニティでも、中国語やヒンディー語のエスニックメディアの人気は衰えない。まるで、英語しかできない「アメリカ」には見えないように、自分たちの情報を共有しあっているようにすら見える。ほかのどんな利益団体にも宗教組織にも、暗号のようなものは存在しないが、新しい移民集団にかぎって、外国語はとくべつな作用をもっていた。「外のアメリカ」には見せないコミュニティの顔を内部で維持するうえで、シンボリックにも実利的にも役立つからだ。英語ができない移民が今やほとんどいないユダヤ系もあえてイディッシュを大切にしている。(渡辺　58-61)

註４　エスニック（ethnic）という場合は、人種ではなく民族・国籍・言語・文化などの違いを総合したグループ分けを指している。例えば日系も韓国系もベトナム系も人種的にはアジア人だが、相互の違いは大きいので、エスニシティ（ethnicity）による線引きがより実際的である。アジア系はアメリカでは依然少数派だが、特に日系、韓国系、中国系などは教育への関心が強いので、良い仕事につく割合が多い。それに対して、他のエスニック・グループからの反発も強いと言われる。

註５　もともとゲットー（Ghetto）は、ヴェニスにあったユダヤ人隔離地域のこと。現在では、都市部のマイノリティ居住区を指し、特に社会的・経済的な理由で苦しい生活を強いられている人々が住む場所のこと。

＜ポイント解説＞

英語ができない「アメリカ人」の割合は年々増えており、意識的に英語を使わない人も含めると、もはや英語をアメリカの国語と呼ぶのがためらわれるほどだ。エスニシティの違いごとに閉じられたコミュニティというのも、ひとつのアメリカン・コミュニティのあり方である。

資料２

＜引用３＞　『ジュノ』に見るアメリカの郊外

アメリカにおける「郊外」を知るには、映画『JUNO／ジュノ』（2007 年）が興味ぶかい。主人公の高校生ジュノが、バンド仲間の男子学生とのあいだに望まない妊娠をしてしまう。子供を産むべきか、諦めるべきか。ジュノは産むことを決意する。しかし、自分で育てることは断念し、養子にもらってくれる里親夫婦を折り込み広告で探す。ジュノはブルーカラー労働者の父と後妻の母といっしょに、ミネソタ州の小さな家で暮らしている。ジュノが選んだ子供のできない若夫婦は、郊外の住宅に住んでいた。そこへ行くには、車で貨物線路沿いの大平原を駆け抜けなければならない。夫はコマーシャルソングの作曲家、妻は暖炉から花瓶までピカピカに磨いている。純白のフレームで階段に飾られた夫妻の写真の数々は、この家では単なる家族写真ではなくアートでもある。

ジュノは、里親になるヴァネッサと話がことごとくかみ合わない。ジュノが養子募集の広告を見つけた「ペニーセイバー」と呼ばれる折り込み冊子もヴァネッサには馴染みがない。ペニーとは 1 セント硬貨のこと。文字通りセント単位のお買い得に一喜一憂するジュノの近所では、こうした「売買」情報誌は自然な読み物だ。広告の掲載先を夫に知らされていない様子のヴァネッサは、ペニーセイバーで見つけたと語るジュノに困惑の表情を見せる。

マーサ・スチュアートという家事デザインなる分野で人気を集めた女性がいる。「クリスマスツリーの飾り付けを作りましょう」「テーブルクロスを秋風にしてみましょう」「キャンドルとお皿の色をハロウィン流にしてみましょう」。ゆとりのある暮らしのなかで楽しむ、毎日の最低限の暮らしには無関係な、遊び心のある衣食住のデザインを提案し、テレビ番組や関連書籍で有名になった。スチュアートの本や『レイディーズ・ホーム・ジャーナル』を参考に、カーテンやベッドメイキングであれこれ悩んだりするのが、こうした郊外の中産階級である。（渡辺　76-77）

＜ポイント解説＞

『ジュノ』を観る際に、上記のポイントを確認していただきたい。その他にも、中絶や養子縁組、家族構成などの点でも、かなりリアルにアメリカの現在が描かれているので、見逃さないように注意しておきたい。子供部屋のシーンで（DVD では直されていたが）字幕が誤っている箇所があったので、それはどこか考えてみてください。「補足」としてお渡しするプリントも参照のこと。

＜引用４＞　拡大する郊外

郊外は拡大する一方だ。1970 年代以降、インナーシティの拡大のあおりをうけて郊外が膨張し、郊外のさらに外に富裕層がエグザーブ[6]という「準郊外」を形成した。ほとんどが農村だったようなところにも「準郊外」はうまれた。ジェィシー・ペニー、ベスト・バイ、トイザラスといった衣料品や電化製品の大規模小売店が入ったモールも大型化していった。駐車場のいちばん端に停車すると、モールの入り口にたどりつくまでにちょっとしたハイキングになる広大さであり、高速道路に乗ってモールに買い物に行くスタイルも州や地域によっては日常化した。

都市が拡大して「都市よりの郊外」ができたのにたいして、かつてのブルジョアの夢としての郊外の徹底化も進んだ。1990 年代以降は西海岸や高速道路沿いの遠隔地に「エッジ・シティ」[7]という郊外が

出現したが、大半は通勤圏内とは思えないほど中心からはなれた場所につくられた。1998 年頃から、郊外の郊外「準郊外」に住む富裕層の主婦は、前出のマーサ・スチュアート的ライフスタイルをモデルに「マーサ・スチュアート・ママ」と呼ばれるようになった。子育てに一段落つきながらも、年老いた両親の介護で、医療問題に関心の深い保守層だ(8)。環境を考える集会に参加するよりも、教会の広報誌を読み、自宅で春向けの模様替えにテーブルクロスを縫いたいのが「マーサ・スチュアート・ママ」である。（.....）

そして階層を越えて出現しているのが、安全に躍起になる「セキュリティ・ママ」だ。アメリカで強まるセキュリティ意識は、郊外コミュニティを「囲う」ゲーティッド・コミュニティ(9)もうみだした。フィリピンやタイなど東南アジアにある、外国人駐在員や富裕層が住むための囲われた居住地と外見上は同じだ。途上国に多い印象があるが、これがアメリカのなかにもどんどん増えている。2001 年の国勢調査では､約 700 万世帯がフェンスなどで囲われたコミュニティに住んでおり､そのうち約 400 万世帯が、暗証番号やキーカード付きのゲートやセキュリティーガードがいるゲーティド・コミュニティの住人だという。多くのコミュニティで警備は 24 時間体制だ。（渡辺 86-88）

註６　exurb。郊外（suburb）が sub + urb つまり「都市に付随する」というような意味なのに対して、ex + urb は「都市の外の」という意味。

註７　edge city。文字通り「端っこの街」。通勤先としての都市に属しているという感覚は希薄で、エッジ・シティ自体にビジネスの拠点が置かれている場合が多い。

註８　大まかに言えば、都市にはリベラルな人々が多く、民主党の地盤となっている。共和党支持の保守層は、こうした郊外に住む人々や、田舎の人々がほとんど。

註９　gated community。ゲートで閉じられていることからこう呼ばれる。街を囲い込むことは昔からあったが、生活に必要な施設を完備し、高度なセキュリティで守られているハイテクなゲーティド・コミュニティーは、ごく最近生まれたもの。白人以外も多く住むが、黒人には人気がないと言われる。

＜ポイント解説＞

『ステップフォード・ワイフ』の舞台も、一種のゲーティド・コミュニティである。ただし相当誇張されているので注意が必要。この映画の元となった 1975 年の映画やその原作である小説は、1960 年代後半から盛んになったウーマン・リブ（女性解放）運動に対して男たちが抱いた恐怖を戯画的に描いている。郊外は保守的な傾向があると述べたが、そこで理想とされるのは、戦後の豊かな時代のアメリカの家族でありスモールタウンの暮らしである。働き者で優しい父と良妻賢母の母、素直な子どもたち（男の子と女の子ひとりづつ）が、最新の電化製品に囲まれて楽しく暮らす、アメリカの典型的なホームドラマの設定を思い浮かべるとよい。現代においてこれを再映画化するのは時代錯誤な感じがするが、郊外生活がある意味でアメリカ全体の縮図になっていて、変わり映えのしないハイウェイとショッピング・モールの風景がどこまでも続く、均一化されたアメリカの空間を風刺したものとして観ると、あまり古臭くはない。主人公がどのようなところに違和感を覚えたのかを注意して観てみたい。

異文化理解科目（英語）A　　第四週講義資料

世界での英語の受容とグローバリゼーション

＜授業のポイント＞
今回の授業内容は、やや強引な構成になっています。まず受講生よりいただいたリサーチ結果を報告し、それについての補足説明を行います。それから世界各地でどのように英語が受容されているかについての追加資料を読みます。そのあとにもう一つの大きなテーマであるグローバリゼーションについて考えるために、「マクドナルド化」「国境」という話題で話を進めていきます。

１．リサーチ課題のサンプル　（補足資料２）

・受講生から寄せられたリサーチ課題の結果を報告する

２．高島俊男『お言葉ですが…』を読む　（資料１）

・「ナイター」誕生秘話
・英語文化にない概念
・「英語信仰」

３．世界の英語受容　（資料２）

・フランス人の例
・世界各地で英語はどのように見られているか

４．「マクドナルド化」　（資料３）

・「マクドナルド化」とはいったい何か？
・マクドナルドの拡大戦略とマクドナルド的なものの逆輸入
・マクドナルド化と産業のシステム
・マクドナルド化とグローバリゼーションは同じものか？

５．ファーストフード文化と国境地帯の現実　（資料４）

・アメリカとメキシコの国境地帯について
・ケーススタディー：映画『ファーストフード・ネイション』（*Fast Food Nation*、2006）を観る。

※参考文献は、各資料に記載してありますので、そちらをご参照ください。

資料１

高島俊男『お言葉ですが…⑥　イチレツランパン破裂して』(文春文庫、2005 年)より

＜引用１＞　「『ナイター』誕生」(48-56)

ナイターの季節だ。

この「ナイター」ということば、和製英語の最高傑作と評価が高い。

和製英語というのは概して、ガソリンスタンドとかワンルームマンションとかいったふうな二語（あるいはそれ以上の）くみあわせが多い。しかるにナイターは一語で短く、しかも本物英語の「ナイトゲーム」よりしゃれている、というのが好評の理由である。

ではこの傑作和製英語は、いつ、だれが作ったのか。(……)

昭和八年七月、戸塚の早稲田大学安部球場に照明設備ができ、同年十月、早稲田の二軍と新人が試合した。これが日本初の夜間野球。二軍があり、その下にさらに新人チームがあったのだから、当時の大学野球はすごい。主力は、「夜の試合なんか下っぱにやらせとけ」って態度だったんですかね。

その一週間前七月三日夜に、同じ安部球場で、日仏対抗のボクシング試合がおこなわれている。これも「昭和二万日」に写真が出ているが、もう大観衆だ。野球以外も含めればこれが日本初ナイターということになる。(……)

というわけでナイターの歴史は黄金の昭和八年までさかのぼるのだが、「ナイター」ということばの誕生は、やはり昭和二十五年「後楽園初ナイター」の前後である。

小生の知るかぎり、このことばに関する文献で最も中身が濃く、ゾクゾクするほどスリリングでおもしろいのは、上野景福先生の「Baseballese としての nighter」である。昭和三十七年に『英語青年』に発表され、現在は『英語語彙の研究〔改訂増補版〕』(研究社出版）におさめられている。baseballese は野球用語、上野先生は当時東京大学教授。

以下は上野論文の受け売りです。

上野先生の調査によると、はじめて「ナイター」ということばがあらわれたのは後楽園初ナイター直前の『週刊ベースボール』六月三十日号で、高山方明「日本のナイター」、山崎安治「本場アメリカのナイター」と署名記事が二本のっている。筆者二人とも『日刊スポーツ』の記者である。

その『日刊スポーツ』の記事に「ナイター」がはじめてあらわれたのは七月五日、つまり初ナイター当日である。同じ日の『スポーツ日本』にも「ナイター初練習は上々」の見出しがあるが、これは前記週刊ベースボールの用語をさっそくもちいたものらしい。「ナイター」ということばが昭和二十五年の六月末から七月はじめにかけて生まれたことは確実である。

四年後の昭和二十九年、上野先生はアメリカの新聞社や野球関係者に問いあわせて、アメリカには nighter という語はないことを確認している。

ただし、あとに night のつく複合語に er がついた語は昔からある。たとえば芝居の初日を first night と言い、必ず初日を見に行く人を first-nighter と言う。あるいは all night (終夜) er をつけた all-nighter（終夜働く人）という語もある。この種の語は無論性格が別である。

昭和三十六年上野先生は『週刊新潮』「掲示板」に、だれがはじめて「ナイター」を使ったのか、という質問を出した。前記高山氏が、同僚の山崎氏に教えられて自分がはじめて使った、と名乗り出た。

そこで上野先生が山崎氏をたずねて当時の事情をきいてみたところ、AP 通信の電報でしばしば nighter という俗語を見たのでこれを使ってみたものだ、とのことであった。「ナイター」創始者は日刊スポーツの山崎安治記者であることがはっきりした。

しかし当時アメリカに nighter という語はないのだから、AP 電に出てくるはずがない。山崎さんは何を見たのだろう？

戦後アメリカで、同じチーム同士が夕方から夜にかけてつづけて二試合するダブルヘッダーがよくおこなわれるようになった。これを twilight-nightgame もしくは twilight-night double-header と言う。たまたま twilight と night が同韻なので、これをちぢめた twi-night という言いかたが生じた。そしてこれに er をつけた twi-nighter（薄暮夜間ダブルヘッダー）という野球俗語が生れ、これが AP 電野球記事にあらわれた。

これは twilight-night ないしは twi-night という複合語に er がついたものであるから、先の first-nighter や all-nighter と同種である。したがってアメリカ人には、nighter という語が存在するという意識はない。しかし形の上ではたしかに-nighter という語形が紙面にあらわれている。山崎氏はこれを見て、アメリカには nighter という語がある、と思ったのである。

ニューヨーク発の AP 電が nighter という語をはじめて使ったのは、日本の「ナイター」におくれること十二年の昭和三十七年（一九六二年）である。このことはすぐに『ジャパンタイムズ』のコラムでとりあげられた。「日本人が発明した英語“ナイター”が、アメリカで野球用語として承認されたもようだ」と。

かくて一スポーツ記者の誤読から生れた「ナイター」は、本場に輸出され、もちいられるようになったのだ。

いやまさしく、和製英語の優等生でありますね。（……）

[後日談]

このあとに、その AP 電が引用してある。（……）

〈 Other games were nighters. Cincinnati at Brooklyn, St. Louis at Philadelphia and Chicago at Boston. 〉

たしかに単独で「ナイター」とある。（……）

つまりはドンデン返しということになるわけだが、しかしまた、昭和二十年代末に上野景福先生がニューヨーク在住の知人をつうじてアメリカの各新聞社に問合せた際、どこども“What is a ‘nighter” in connection with baseball?”“‘Nighter’? How do you spell it?” “Oh, a ‘nighter’?? I don’t know.”といった返事だったことはたしかなのである。一般的に言って、アメリカに「ナイター」ということばがなかったことは肯定してよい。一九四九年に AP 電にあらわれた Other games were nighters.はきわめてまれな用法であり、それがたまたま山崎氏の目にとまった。そして山崎氏はそれを、アメリカで一般的にもちいられている用語だと思った、ということなのではなかろうか？

高島俊男『お言葉ですが…⑤　キライなことば勢揃い』(文春文庫、2004 年)より

＜引用２＞　「何代目？」(141-147)

こういう有名な話がある。

ある時（たぶん大正の末ごろ）英語の先生たちが数人あつまって話しているうちに、「ウィルソン大統領はアメリカの何代目の大統領か」を英語で何と言うか、という話になった。皆してくびをひねったが、だれもわからない。「何代目」がむずかしいのである。そこで、これは一番英語の神様斎藤秀三郎先生におうかがいしようじゃないか、と衆議一決し、うちそろって神田錦町なる正則英語学校の校長室に参上、「先生これはどう言えばよろしうございましょう」と質問した。

ところがなんと、これが神様にもわからない。

「いま和英辞典を作っているから、かならず入れます」と、先生はカードに書いて箱に入れた。

数年後『斎藤和英大辞典』が出たのでさっそく購入してしらべると、「番目」のところに「何番目」という項があって How manieth というだれも見たことのない英語が出ていた。それに、

「是は“twentieth”“thirtieth”に倣へる新造語にて英語唯一の缺乏を補ふもの、未だ辭典の認む處に非ざれば之を用ふるも用ひざるも隨意なり」

と注記がついている。そして、How manieth president was Mr. Harding? と例文がかかげてあった。

数年前に質問をうけた際とっさに答えられなかったのも道理、そもそも英語には「何代目」にあたることばがないのである。

そこで斎藤先生は、よし、ないのならおれがつくってやろう、と How manieth という英語を創作して自分の辞書で発表したのだ。(……)

もっとも、大村喜吉先生がこう言っていらっしゃる（『斎藤秀三郎伝』)。

〈 How manieth は、しかし、COD で Fowler が Nonce word としてではあるが用いていることを注意しておきたい。 〉

COD はコンサイスオックスフォードディクショナリ（Concise Oxford Dictionary)。ファウラーはその編纂者。ノンスワードは臨時語。(……)

斉藤秀三郎が How manieth の発明で急場をきりぬけて以来、「リンカーンはアメリカの何代目の大統領ですか？」は和文英訳の好個の題目になり（なぜかリンカーンに一定した)、各和英辞典は競うて新案を披露する。

研究社の『新和英中辞典』は、Where in the order of American presidents does Lincoln come?、直訳すれば「アメリカの大統領たちのオーダーのなかでリンカーンはどこに位置しますか？」だ。

最新の学研『ニューアンカー和英辞典』はおそろしく簡単で、What number president was Lincoln? ――こんなことでわかるのかねえ。これですむのなら先人たちが苦心することはなかったのだけれど。

すこし古いが、『英語青年』一九七五年八月号に、加藤和男先生の「何番目」と題するおもしろい記事が出ている。

加藤氏はヴォネガットの『モンキー・ハウスへようこそ』で“If all the Remenzels who went to Whitehall were numbered, what number would Eli be?”というせりふを見つけ（Whitehall は学校の名)、こう書いていらっしゃる。

〈 「何番目」（ドイツ語の‘wievielte’）にあたる英語はないが、その概念を表現する必要を感ずることはあると見えて、上記の例のような表現が目にとまった。これにならうと、「リンカンは何代目の大統領か」は、“If all the presidents were numbered, what number would Lincoln be?” となる。〉

これを直訳すれば、「もし全部の大統領たちにナンバーを附するとしたら、リンカーンはどのナンバーになりますか？」となる。もとづくところがあるだけに、和英辞典の競演よりこのほうがたしかそうな気がする。（……）

「『何代目』を英語で何と言うか」よりも、「なぜ英語にはそのことばがないのか」を考えるほうが、小生にはおもしろい。また、そのほうがだいじであるとも思われる。

〔あとからひとこと〕

三井物産におつとめの佐野良雄さん（現在ハーバードビジネススクールで研修中とのこと）がお手紙をくださった。

〈　早速こちらのアメリカ人に何と言うのかを質問しました。

How many presidents have there been? What would Clinton be?　（今まで何人大統領がいた？　クリントンは何番目？）というのが最も一般的だそうです。

さらに子供が言うと、

What number is president Clinton?

という言い方も可能とのこと。

但しそれに対する答えは、Who cares?（知ったことか）とか、Worst!（最悪！）とかになるのだそうで、すなわち何代目かは何らの意味を持たず、その大統領がどのような大統領であるかが問題、従って数を数えることもない、ということのようです。（…… 〉

＜ポイント解説＞

「何代目」という言いかたが英語にないというのは、「１代目」「２代目」という言いかたがないという意味ではない。何代目であるかを気にしない文化ゆえに、それにあたる表現が生まれなかったということだろうか。ただし、アメリカで永住権や市民権を獲得するためには面接試験を受けなければならないらしいが、その際に「〇代目の大統領は誰か？」という質問が定番になっているらしい。一応順番を付けて覚える習慣はあるようだ。

＜引用３＞　「日本人の英語信仰」(148-153)

日本人の英語学習熱は明治維新と同時にはじまった。なにしろ変わり身の早い国民性だからね。昨日まで津々浦々に漢籍素読の声がきこえていたのに、きょうは打ってかわって日本国中に ABC がひびく、という状況になった。

以来百数十年、日本人（特に知識人）の英語能力が一番高かったのは明治の十年代である。

それはそのはずで、学問も技術も法律もみな西洋に学ぶことになって学校がぞくぞくと設けられたが、日本人でそれを教えられる者はいないから西洋から教師を招いた。授業はもとより、質問応答も試験もレポートもみな英語である。英語ができないとどうにもならぬ。うまくなるのはあたりまえだ。

もっともはじめのうちは、フランス人教師はフランス語、ドイツ人教師はドイツ語で授業したのだが、それでは生徒の方がたまらないので、たどたどしくてもいいから、とすべて英語でやってもらうことにしたのである。（ただし医学だけはずっとドイツ語だった）。（……）

日本人の英語能力は明治のなかばごろになるとガクンと落ちた。西洋の学問をおさめた日本人教師が育ってきたからである。

夏目漱石は明治三十六年に英国留学から帰って東京帝国大学英文科の講師になった。最初の授業の時「英語でやろうか日本語でやろうか」ときいたら学生は、英文専攻のくせに一人のこらず「日本語でやってほしい」と希望した。前任のラフカディオ・ハーンまでは、もちろんみな英語だったのである。

その漱石は、「最近の学生の英語力低下についてどう思うか」と人に問われて、「それは当然だし、わるいことではない」と答えている。たしかに、知識人が自国語よりも英語のほうが便利だというのは植民地的風景である。

漱石がロンドンから帰って日本の大学の教壇に立った明治の三十年代ころから、日本人の英語学習の様相に大きな変化があらわれてきた。

それまでの人たちは、学問や商業をやるために英語を学んだ。英語は、何らかの目的のための手段であった。

ところがこの明治なかばごろから、英語のために英語を学ぶ、という人たちが全国いたるところに多数出現してきた。それでどうしようというのではない。それ自体が目的なのである。

実際的な目的は何もないのだからこれはもう一種の信仰である。英語は神格化され、英語学習は宗教の修行のようになった。

＜ポイント解説＞

高島さんは他にも、戦時中英語が禁止されたというのは全くのでたらめだと書いている。これは戦後に一種の都市伝説として定着したもののようである。敗戦によって、アメリカから英語が押しつけられたかのように言い張る人がいるが、それは全く的外れな考えだ。むしろ明治以来英語を独自の方法で日本に定着させてきた伝統があり、その独自性にこそ注目すべきではないだろうか。とはいえ、「英語信仰」というものが根強いのも確かで、それは英語ができないことのコンプレックスや、どうせ出来なくても構わないという開き直りとセットになっている。英語で書かれているものの方が少し上等に見えてしまうということがないとはいえない。耳の痛い話である。

資料４

Gaynor, Tim. *Midnight on the Line: The Secret Life of the U.S.-Mexico Border.* New York: Thomas Dunne Books, 2009. より

＜ポイント解説＞

映画『ファーストフード・ネイション』では、ファーストフード・チェーンの社員が、ハンバーガーのパテに使われる牛肉に糞が混入していた件を調査するため、コロラド州の精肉加工工場を視察する。それと並行して、その工場で働くメキシコからの不法入国者たちの様子が描かれる。さらに、工場のある町のハンバーガー屋のアルバイトである高校生が、業界の事情を知って店を辞めるエピソードも盛り込まれている。今回の授業内容で取り上げたテーマ（グローバリゼーション、英語の重要、マクドナルド化）を具体的に考える上で参考になると思われる。メキシコからの密入国の話が重要なので、以下に資料を挙げて簡単に解説する。

参考文献の著者 Gaynor はイギリス人のジャーナリストで、ロイターの記者として、アメリカとメキシコの国境地域の取材にあたった。密入国者や麻薬の密売人、国境警備隊などにインタヴューを重ね、また不法移民がアメリカに向かう際のルートを同じようにたどり、リアルなルポルタージュを完成させた。

メキシコとアメリカの国境地帯は、小説や映画でもしばしば取り上げられるモチーフである。2005 年のサッカー映画 *Goal!*でも、まず主人公の一家がメキシコからアメリカに密入国する様子が描かれた。また 2007 年の *No Country for Old Men*（邦題『ノー・カントリー』）も国境地帯が主な舞台で、主人公は麻薬の密売人から奪った金を持って、メキシコに逃れようとする。ちなみに『ノー・カントリー』で悪役の殺し屋が使う空気銃は、牛を屠殺するさいに使われる機械を連想させる。『ファーストフード・ネイション』の終盤や、同じく食品製造の秘密を追った 2005 年のドキュメンタリー*Our Daily Bread*（原題 Unser täglich Brot、邦題『いのちの食べ方』）に、その場面が出てくる。メキシコ側から見ればアメリカは夢の国であり、豊かさの象徴である。逆にアメリカから見たメキシコは、困った時に逃げ込むための避難所というイメージが強い。

Gaynor によれば、不法移民がたどるルートは“one of the toughest foot journeys on earth” (Gaynor 2)「世界で最も過酷な徒歩の旅」であり、この国境地帯は“the most contentious border on earth” (Gaynor 3)「世界で最も議論を呼ぶ国境」である。さらに“tens of thousands of border crossers headed north each year, most with the aid of professional smugglers, in an illicit trade worth billions of dollars annually” (Gaynor 3)とあるように、不法移民の数は相当なもので、彼らを手助けする違法な仕事が一大産業となっている。多くの場合すでにアメリカにわたって働いている家族などがスポンサーとなって、これらの経費を支払っているらしい。

次の引用は、Gaynor が徒歩での国境越えに向かう前に、国境のメキシコ側の町で旅支度を整えているところである。水や食料などの必需品を揃えるためにマーケットに行くが、そこには意外なものが売られていて、しかもかなり良く売れているらしいことが分かる。この場面には、メキシコからの密入国者の気持ちが良く表れているように思う。

異文化理解科目（英語）A　　第五週講義資料

イギリス人気質とイギリス社会の変容

＜授業のポイント＞
今回はイギリスの特にイングランド、さらにロンドンを中心に話を進めます。まず、いかにもイギリスらしい事柄について確認したあと、福祉国家イギリスの現状や、多民族社会イギリスについての様々な意見を紹介します。次回の資料と併せて、出来るだけ多角的にイギリスの文化に迫りたいと思います。

１．トラブルを楽しめ　（資料１）

・ロンドン在住日本人のインタヴュー――ロンドンに滞在していて避けられないこと
・補足解説――日常的なトラブルにどう対処するのか

２．福祉国家イギリスの現状　（資料２）

・NHS とは何か？　財源は何か？
・階級意識の希薄化と危機感
・伝統主義者の反論１――世界の面倒まで見ていられない

３．伝統の保護か多元主義の推進か　（資料３）

・エスニック・マイノリティの台頭――階級との関係
・エスニック・マイノリティと様々な分断線
・信仰か観光か――キリスト教の求心力低下と新たな宗教
・アメリカとは違う――あるイギリス人一家の視点
・伝統主義者の反論２――田舎のことは田舎に任せろ
・映画『ぼくの国、パパの国』（*East Is East*, 1999）を観る。――1970 年代初頭、マンチェスターに暮らすパキスタンからの移民と白人イギリス人の妻とその子供たちの物語。親同士の決めた結婚に反発する子供たちと、イスラムの伝統に固執する父親。インド・パキスタン国境には不穏な空気が満ち、イギリスでは移民の強制送還が議論されている。世代間の対立はどのような結末を迎えるのか。

＜参考文献＞
小野修編著『現代イギリスの基礎知識――英国は変わった』明石書店、1999 年
黒岩徹、岩田託子編『ヨーロッパ読本　イギリス』河出書房新社、2007 年
林信吾『イギリス型〈豊かさ〉の真実』講談社現代新書、2009 年
Gaunt, Jon. *Gaunty's Best of British: It's Called Great Britain Not Rubbish Britain.* London: Virgin Books, 2008.

＜解説＞
インタヴューイーの方によれば、少し前にロンドンで珍しく大雪が降った時は、地元の人たちはみな「困った、困った」と言いながら、いかに困っているかを楽しそうに話していたとのこと。また彼の意見では、イギリスのいろいろなシステムやサービスがいい加減なのは、国の政策ではないかと疑われる。つまり、普段からほどほどに不便を強いることで、我慢強い国民を育成しようとしているということだ。どこまでが本当のことか分からないが、あるがままを冷静に受け入れる姿勢は、いかにもイギリス的ではある。

ちなみに、インタヴューの中で“flooding”というものが出てくるが、これを「洪水」と訳すと不正確になってしまう。ロンドンでは日本のような豪雨はほとんどないので、たまに大雨が降って地下鉄駅に少し水が入り込むと、それを“flood”だと言って騒ぐのである。

ロンドンの地下鉄にまつわるこうしたエピソードは、イギリス的なものの考え方、生き方を典型的に示しているように思われる。次の引用では、その点をさらに考えてみたい。

資料２

＜引用２＞　NHS について

さまざまな批判を浴び問題を抱えつつも、イギリスらしい福祉国家の証が NHS ことナショナル・ヘルス・サービスで、経費のほとんどは税金と国民保険制度による分担金からまかなっている。支払能力にかかわらず、必要があれば医療が受けられるようにと、アトリー[Clement Richard Attlee]労働党内閣のもと 1948 年に、90 パーセント以上の医師の賛同を得て発足した。その結果、これまで医療から置き去りにされていた労働者階級のとくに婦女子が恩恵をこうむることになった。

しかしながら、新しい医療技術への投資や解決の難しい従来からの健康問題など、発足時に想定された以上に経費が嵩み、国の財政を圧迫してきた。サッチャー政権下[1979-1990]では、改革を目指し、個人健康保険による個人医療への移行を国民に勧めたが、なにぶん個人負担がかかることで、芳しい成果はあげられていない。

NHS では患者の 80 パーセントが医療費無料になる。具体的には、義務教育終了年の 16 歳までの小児・学生・高齢者・妊婦・重病者・低所得者・障害者が該当する。処方箋料、眼科検査、歯科以外は、イギリス国民ならば無料である。

NHS のルールでは、まず、ジェネラル・プラクティショナー（GP）と呼ばれる、地域で登録している医者に初診を受け、必要に応じて専門医にかかる。ただ、緊急ではない場合、手術や入院までの待ち時間が長く、いたって効率が悪い。処置の迅速化のために、予約なしで診察・治療を行う医療機関も活動を開始し、年に 25 万人を診ている。

このようなまどろっこしい制度に業を煮やし、また高額医療費を意に介さない懐の暖かい者には、個人病院の医者に予約診療してもらうという方法がある。ロンドンの中心部ハーレイ・ストリートは、そのような診療所が軒を連ねる通りとして名高い。ショッピング街オックスフォード・ストリートからリージェンツ公園に向って北上する通りの一つであるが、繁華街とは異なり人通りはまばらである。診療科と医師の名が控えめに記されたネーム・プレートが扉横に掲げられた建物が連なる。ハーレイ・ストリートの医療街としての成立は、19 世紀中頃にまで遡るが、現在は付近に病院も多く、3000 人以上の医療関係者が従事する地域となっている。（黒岩、岩田編　88-89）

＜ポイント解説＞

NHS 発足の時代背景をみると、戦後の復興期と重なっているのが分かる。この時期にイギリスは、社会主義路線へと傾いていた。労働党が力を得たのも、戦争の痛手から回復するために、「大きな政府」による手厚い保障を必要とする民意があったからだ。George Orwell が小説 *1984* を執筆したのも同じ頃だが、そこで描かれる全体主義のモデルとなったのは、スターリンのソ連だけでなく、急速に政府の力が増していくイギリスの姿でもあった。どちらかといえば、NHS のような制度はイギリス人の伝統的な個人主義にはそぐわないものである。また、学校教育でも同じことが言えるが、基本的にすべての国民に無料のサービスを提供するというのが建前だとしても、現実にはサービスの質が低下し、結局金銭的に余裕のある者だけが民間のより質の高いサービスを受けられることになる。つまり、階級差によるサービスの差をなくした功績は認めるべきだが、経済的な格差が新たな階級差を生みだしているというのが現状なのである。

＜引用３＞　財源は？

英国では医療が無料である、という話をすると、まず例外なく、日本人の口からは「素晴らしい」「うらやましい」といった感想が聞かれる。しかし同時に、かなりの確率で、「財源はどうなってるんですか？」

という質問を受けたりもする。そんな時、私は決まって、こう問い返す。

「日本の消費税に相当する、VAT（value-added tax＝付加価値税）というのがあるんですが、これの税率、どれくらいだと思います？」

……これまで正解できた人はいなかったので、さっさと発表してしまおう。17.5 パーセントである。

これでまず、大いに驚かれるのだが、

「それでもまだ、ヨーロッパ諸国に比べると、安い方なんですよ」

と話を続けると、聞かされた側はまず例外なく、信じられない、という表情を見せる。しかしこれは、事実なのだ。

オランダやドイツでは、付加価値税の税率は 19 パーセント。フランスではさらに高くて 19.6 パーセント。イタリアやハンガリー、オーストリアに至っては、とうとう 20 パーセントの大台に乗る。ベルギー、ポルトガルではなんと 21 パーセント、デンマーク、スウェーデンに至って、ついに 25 パーセントに達する、という具合だ。英国よりも低い税率の国となると、スペインの 16 パーセント、スイスの 7.6 パーセントくらいしかない。

もともと付加価値税とは、1967 年に当時の EEC（欧州経済共同体）が導入したものだ。EEC は言うまでもなく EU（欧州連合）の前身で、加盟国内においては一切の関税障壁を撤廃し、単一市場の形成を目指したわけだが、逆に考えれば、各国とも関税収入が激減することとなる。だからと言って法人税や所得税を高くすると、今度は折角大きな市場を生み出しても、海外（市場域外）からの投資を呼び込みにくい。そこで、商品やサービスに広く課税する方式が考え出されたわけだ。（林　15-17）

＜ポイント解説＞

この VAT は、青果などには課税されない。しかし食料品でも加工がしてあったり、あいだに人の手間がかかっているものにはことごとく VAT が加算される。飲食店などでは、あらかじめ VAT とサービス料が料金に含まれていることが多いので、伝票をよく見てから支払いをしたい。ちなみに旅行者などは空港で VAT の払い戻しを受けることができる。しかも旅行者であっても、ほとんどの場合無料で医療サービスを受けられるので、VAT も免除されるとすれば、文字どおり無料で済むということになる。後ほど確認するように、イギリス人の中には、このことを快く思わない人もいる。

＜引用４＞　チップの制度と職業的身分

欧米では、受けたサービスに対してはチップを支払う習慣がある。私は一定水準以上のレストランで食事をした場合、英国なら 5 ポンド、ヨーロッパ大陸諸国なら 10 ユーロ、つまり 1000 円程度を目安にして払う。朝、ホテルの部屋を出るときは、小銭を枕の下に置いて行く。部屋を掃除し、ベッドメークをしてくれる人へのチップだ。しかし、相手が医師や弁護士の場合は、報酬にチップを上乗せして払うのは、逆に失礼だと考えられていた。このあたりのニュアンスは伝えるのが難しいが、要するに、社会的地位から言えば「目上」だからである。ただ、どこの国でもタテマエと本音の使い分けということはあ

るので、昔の英国では、医師や弁護士への支払いは、ポンドでなくギニーで行っていた。

現在の、1ポンド＝100ペンスという単位が導入されたのは1971年のことで、それ以前は、12ペンスで1シリング、そして20シリングで1ポンド、というように、ややこしかった。

で、ギニーというのは、英領ギニアで産した金を用いて鋳造された金貨のことで、額面 1 ポンドの金貨、すなわち1ギニーは、1ポンド1シリングとして通用した。早い話が、10ポンドなら10ポンドの請求書に対して、ポンド紙幣でなくギニーで支払うことにより、事実上 5 パーセントのチップを上乗せしていたわけだ。

偉そうにしていながら、受け取るものはちゃんと受け取っていた、とも言えるわけだが、しかしまあ、これが文化というものなのだろう。

ベヴァン[Aneurin Bevan、アトリー内閣の保健相]がやってのけたのは、このように社会的地位の高かった医師を、シヴィル・サーバント（CIVIL SERVANT）にしてしまうことであった。一般的には「公務員」と訳してよいのだが、つまりは税金から報酬・給与を受け取り、国家と納税者にサービス（奉仕）する人々のことである。軍人のことをサービスマンとも言う。

医療を国家が管理し、医師をシヴィル・サーバント扱いにするということは、英国の伝統的な階級社会の考え方からすれば革命的なことであった。ベヴァンら労働党左派の立場から言えば、この政策はれっきとした「階級闘争」だったのである。（林　49-51）

＜ポイント解説＞

イギリスの階級制度は、よく江戸時代の日本と比較される。「武士は食わねど高楊枝」さながらに、上流階級の人々は、無理をしても体面を守らなければならないのである。そうした階級の違いを敬意をもって維持することで、伝統的なイギリス文化が形成されてきたと言える。しかし先ほども述べたように、戦後イギリスの社会変革においては、国家が力を増し、それに応じて伝統的な社会階級の意識は薄れていった。それとともに、伝統主義者たちは、国家や政府に対する不信感を募らせていった。彼らからしてみれば、現代のイギリスでは「旧き良き」価値がないがしろにされているように感じられるのである。次の引用も、かなり保守的な視点で書かれた本からのものだ。

資料３

＜引用６＞　エスニック・マイノリティ

現代のイギリスを語る時に階級と同様に無視できないのは、エスニック・マイノリティの問題である。自他ともに認める「多民族国家」イギリスにおいて、少数民族の人々はどのようなかたちで階級社会に入れられていくのか。

イギリスの少数民族のうち、もっとも大きな部分を占めるのは、インドとパキスタン系の人々である。これらの旧植民地は昔から、その子弟をイギリスに送り込んできていた。彼らは上流階級の子弟で、イギリスの全寮制のパブリック・スクール、あるいはオックスフォード大学やケンブリッジ大学に留学して、イギリスの教育を受けるとともに、きれいな RP 英語[Received Pronunciation]を学ぶのだ。国や文化が違っても、自分と同じ階級の生徒たちと生活し、それ以外の人々と接することのない彼らは、イギリス人の中で学んでいても臆することはない。

しかし、とくに戦後に大量にイギリスに入ってきた移民に関しては、ことはそう簡単ではなかった。彼らの多くはイギリスのために戦い、イギリスを祖国と教えられて育ってきた。英語を流暢に話す彼らは（ただし、それぞれの国のなまりはあるが）、イギリスで仲間として温かく迎えられることを期待していたが、現実は違っていた。国に帰れとののしられ、アクセントを馬鹿にされ、野蛮人のように見られる。暴行を受けたり、家の窓ガラスを割られたりするうえ、警官も味方をしてくれない。彼らはさんざんな思いをしつつも、経済的理由により国に帰ることができないのである。ここまでは、残念ながらどこの国でも移民が出合いかねない問題だろう。しかしイギリスの場合は、さらにここで階級の要素が大きく関わってくる。

移民がもっとも多く接する人々は、彼らの隣人となり職場の同僚となる、ワーキング・クラスおよびロウワー・ミドル・クラスの人々である。彼らは、自分たちの領域に侵入者が入ってきたことへの不快感、職を奪われるのではないかという不安、そして単純に他の国に対する偏見と無知ゆえに、攻撃的な態度に出るのである。

実際、イギリスに暮らす日本人でも、このような差別の対象になることがある。（……）イギリスの事情をよくわからず、あまりよくない住宅地の公立学校に子供を入れてしまうと、いじめられる確率が高くなる。いっぽう、通学制でも全寮制でも、アッパー・ミドル・クラスの子弟が多い私立学校に入れると、うまくいく確率が高くなる。自由と寛容というイメージが強いにもかかわらず、実はきわめて排他的で有色人種に差別的なことが多い、アメリカやカナダの私立学校とは対照的なのだ。

しかし現在では、元は移民であっても、イギリス生まれでイギリス育ち、イギリスを一歩も出たことのない年代の人々が多数を占め始めている。彼らは住んでいる土地のなまりで英語を話し、地域にもとけこみ、肌や髪の色を見なければ、白人のイギリス人と区別がつかない。しかし、元は熱帯地方の出身であることが多い彼らは、見た目はきわめてエキゾチックである。

そのエキゾチックな人々が、ロウワー・ミドル・クラスの英語を話し、郊外のセミ・デタッチドの家に暮らし、地元の公立学校の制服を着て走り回っているさまは、現在でも完全に自然な光景として受け入れられてはいない。（黒岩、岩田編　58-59）

＜ポイント解説＞

新しい移民は昔ながらのイギリスの階級とは無縁であるように思えるが、経済的な事情でやってきた移民の職種は限られ、それによって所属する職業的・社会的階級も決定されるというのが普通である。引用文中に出てくる「セミ・デタッチド」（semi-detached）とは、写真の通り、二世帯がくっついて一つの建物になっているタイプの家屋である。半分つながって半分別々になっているというのが名前の由来。都市部の狭いアパートに比べると、値段も高く、中流の住まいとしては一般的。

また RP とは標準的な発音のイギリス英語のこと。特定の地域の英語を基準にしているというよりは、日本の標準語（江戸の山の手で全国の武士のあいだの共通語として作られた）のように、人口的に設定された発音モデルである。BBC やオックスフォード・ケンブリッジ両大学、あるいは王室の英語とも違うもの。教養のある人が、意識的に身につけて話す英語である。イギリスには様々な訛りや方言があり、どこまで現実を反映しているかは分からないが、一応 RP は「標準的」発音のモデルとされる。（スターク先生のインタヴューも参照のこと。）

ちなみに次の引用にも出てくるが、インド系とパキスタン系の移民人口は多い。しかもその両者は歴史的に見れば仲が悪い。大英帝国からの独立と同時に、インドのイスラム教徒はイギリスによって分離され、パキスタンが建国されたという経緯があるからだ。宗教的な対立も、特に新しい移民の世代では激しいものとなる。

＜引用７＞　多民族国家イギリスの現状

ロンドンの街を歩いているかぎりでは、自分が異色の有色人種であることをさして意識することもない。有色人種とそのミクスト（混血）はそれほどに多い。しかし、国の人口統計では、有色人種は８パーセントにすぎない。ただ居住地が大都市に集中しているのだ。都会を離れてカントリーめぐりなどするろ、行きかう人々は、ほとんど地元の白人となる……。とはいえ国内の有色人種の人口は増加中で、アフリカ系人口は当初の二倍になったと言われる。

ロンドンでも民族によって居住区が異なり、おおむね住み分けられている。ソーホー近くの中華街やテムズ河南岸ランベス地区のカリブ系、西郊イーリングのインド系、イズリントンから北のキプロス系移民のコミュニティなどがよく知られる。

社会生活のさまざまな局面で、民族間の顕著な違いが表れる。男性の失業率は、白人イギリス人やアイルランド人に比べて、カリブ系、アフリカ系のほうが三倍も高い。女性で経済活動と無縁であるのは、バングラデシュ、パキスタン系に多く、カリブ系女性はイギリス人・アイルランド人と同等に、労働に従事している。中等学校卒業資格（GCSE）の成績は、中国系とインド系が優秀で、イギリス人・アイルランド人を上回っているなど。（……）

ところで、初代が移民だったといっても、すでにイギリスでの暮らしも数世代にわたる家族もあり、世代間の様子も異なる。移民一世は英語を話せない「外国人」であったにしても、二世となるとイギリスでの教育を受けて、イギリス社会で暮らすうえで言葉には不自由はなく、むしろ親世代との軋轢が大

きくなり、アイデンティティーの不安に悩むことが多い。三世は受け入れられた国に同化して、二世や一世の微妙な心情を理解するには遠く、四世ともなると祖国との縁が切れてしまっている、と観察されている。(……)

イスラム教徒は、9・11、2005年のロンドンのテロ、また2006年のテロ未遂事件のあと、不当にも危険人物扱いされる局面も多く、受難の日々が伝えられる。八割がたが起訴されずに釈放されるということからも、逮捕がいかに偏見に満ちたものかを推し量ることができる。

なかでも「ロンドニスタン」と呼ばれるほど、パキスタン系は大きな存在となっている。彼らに宗教を問うとイスラム教徒と答えるものが96パーセント、うち「宗教は日々の生活にたいへん重要だとするもの」が74パーセントという統計がある(「第四回エスニック・マイノリティ調査報告」1997年)。対照的に、白人イギリス人(カトリックの多いアイルランド系は除く)のうち、キリスト教を自分の宗教とみなすものは68パーセント。そのうち国の宗教である英国国教会の信者を自認するもので「宗教は日々の生活にたいへん重要だとするもの」が11パーセントなのに、ひるがえって「重要でないとするもの」は55パーセントと過半数を超えた。

多数派ではあるが冷めた英国国教徒と、ホットなイスラム教徒の対比は、あまりに鋭く鮮明であり、この温度差が社会不安を呼ぶのかもしれない。(黒岩、岩田編　69-72)

＜ポイント解説＞

多民族国家としてのイギリスだが、現実には都市部にエスニシティ別の居住地域があって、住み分けがなされていることがほとんどだ。したがってまず一つにはエスニシティによる分断というものがある。それに加えて、世代間の分断、田舎と都市の分断、そして宗教的な分断などが複雑に絡み合って、日々イギリスの地図を書き換えている。「ロンドニスタン」などのように、-istanという語尾を地名につける例を最近はよく見かけるようになった。これはイギリスならイギリスの社会・文化に溶け込むのではなく、あくまで故郷の暮らしをそのまま持ち込んで、閉じたコミュニティを維持しようという意思の表れであり、強烈なエスニック・アイデンティティの発露である。特にパキスタン系イギリス人は、小説や映画でも好んで取り上げられる題材である。今回は後ほど1999年のイギリス映画『ぼくの国、パパの国』(*East Is East*)を観てみることにする。

イギリスの宗教ということで、キリスト教の現状については、次のような報告もなされている。

＜引用８＞　信仰か観光か

教会堂が余っているのは、あちこちにある現象で、使われず見捨てられた状態のものもあれば、アパートやレストラン、倉庫等に転用され、ナイトクラブに変身したものさえあるという。一方、このように転用ではなく、聖堂そのものはどっしりと建ち続けているが、本来の宗教的目的とは少しずれた形で教会の建物が見直されている現象がある。それは観光と結びついていて、教会にも一種の「市場価値」があると論じられたりする。現代のイギリス人は、既成のキリスト教、特に英国国教会を、保守的、体制的なものとみなして礼拝出席は少なく、教会活動にも、聖職者のアピールにも関心を示すことは少ない。しかし、教会の建物や周囲の雰囲気などには愛着の感情を持つらしい。ヨーク、チェスター、ウィンチェスター、ソールズベリ、ダラムなど中世からの歴史を感じさせる都市でこの現象は目立つ。これらの都市には外国人観光客も多いが、訪れるイギリス人も多い。イギリス人の来訪者は、おそらく外国

人観光客と少し違って「旧き良きイギリス」をそこに見出そうとしているのであろう。由緒ある教会堂が少し観光寺院化しているといえよう。会堂の中には、必ずといってよいほどギフトショップがあり、絵葉書、パンフレット、ローソク、カレンダー、CD などを売っている。これらの売り上げは、教会の維持に充てられる。しかし、日本の観光寺院と関連してしばしば問題となる拝観料はなく、あくまで自発的な献金を呼びかけるボックスが出入り口の傍にそっと置いてある。このような教会は一種の「文化遺産」としての役割を果たしているといえよう。事実、「遺産、継承されたもの」を意味するヘリテイジという語が大きく垂れ幕に書かれていて、その中に入るとアンティックな品物のセールや郷土史に関する展示の催しがあったりする。ともかく、このような教会の使い方は、商業主義や郷愁の感覚が作用しているのだが、全く非宗教的といってよいかどうか微妙である。（小野編　192-193）

＜ポイント解説＞

イギリスでは観光も重要な資源である。「旧き良きイギリス」への郷愁というものは確かにあるだろうが、それは単に国内向けのものではなく、外国からの観光客にもアピールする文化的な商品でもある。信仰の場が観光地化する傾向が強くなるにつれて、逆に真にイギリス的なものを保存しようという機運も高まる。それが排外主義的な方向へ向かう場合も少なくない。英国国教会が求心力を失っているとすれば、現代のイギリスで真に宗教的なものとは、そうした「イギリスらしさ」への信奉であるといえるだろう。

宗教施設の維持に使われる献金のスタイルは、美術館などでも採用されている。もっとも、全ての展示を見たければ、別に入場料を払わなければならないのだが。皆がそれぞれのスタイルで無料で芸術を楽しめるように制度を作っておいて、余裕のある人はさらに出費してより良いサービスを受けられるようにするわけだから、発想としては NHS や学校制度と同じである。これらに共通するのは、義務としての税金をしっかり払っているのだから、サービスを受けるのは当然だという考え方である。それは間違ったことではないが、問題がないわけでもない。例えば、ロンドンの街中ではたばこの吸い殻や紙くずなどのポイ捨てが物凄い。よそから来た身としては、街の汚さとマナーの悪さに愕然とするわけだが、これも結局は、掃除するのは税金から給料をもらっている清掃員だから、ポイ捨ては当然の権利だという考え方なのである。

＜引用９＞　アメリカとは違う――あるイギリス人一家の視点

一般的にロンドンで話されている日常会話は、200 言語を超えているという統計もある。これはニューヨークよりずっと多い。いかにロンドンがマルチレーシャル（多人種）社会であるかということがわかる。新聞でも人種間の抗争や、犯罪の増加が毎日のように取り沙汰されている。

ベーカーさんは、イギリス人は外国人の受け入れに寛容すぎると文句を言う。しかしイギリス人の間では、とくにロンドンは多人種社会であるという意識がすでに一般的に定着している。区役所の発行するリーフレットや地方税徴収の説明書も英語だけでなく、ベンガル語や、ヒンズー語、アラブ語、中国語などで書かれている。バスの中や歩きながら携帯電話で話をしている人が多いが、英語以外の言葉が氾濫している。（……）

イギリスはかつて多くの植民地をもった宗主国である。そういった国から移民が来ることは避けられなかったし、また移民の労働力を必要ともしていた。現在イギリスは EU 加盟国として、拡大された EU 諸国から仕事を求めてくる人がどんどん増えている。また、戦争や飢饉による難民を受け入れ、政治亡

命を認めている。景気のよさと整った社会福祉がマグネットとなって、こういった移民や難民を惹きつけていることは間違いない。

しかしゴードンさんも、今の状況がよいとは思っていない。彼はアメリカに行った時のことを思い出しているアメリカにも移民はたくさんいる。アメリカの詳しい法律は知らないが、アメリカはそういった移民にアメリカ人であることを強要しているような気がする。祭日には星条旗を掲げ、英語も含めてアメリカの文化の枠の中に収まるように求められる。いろいろな人種の人が住んでいても、みなアメリカ人ということでまとまり、プライドをもっているような印象も受けた。

いっぽうイギリスでは、移民はその国の文化を持ち込み、言葉、習慣、服装、生活スタイルなどあらゆる面でイギリス文化に同調しようとはしないし、国がそれを強要することもない。そのため移民社会では、出身国のライフスタイルそのままで生活している。サリーを絶対やめないインド人女性、20 年、30 年住んでいてもまったく英語を話さないバングラデシュからの移民の女性たち、イギリス社会と同化しない東欧からの出稼ぎ労働者や、男性優位の社会制度を持ち込む回教徒たち、いずれもそれぞれの移民社会の中で生活しており、イギリス人と接触する機会もなく住んでいる。

ゴードンさんは、会社の同僚のアメリカ人とこの問題で話したことがある。そのアメリカ人も、アメリカと違うイギリス移民の特殊性に驚いており、その辺をベーカーさんは「寛容すぎる」と怒っているのだ。しかし、どうしたらよいのかゴードンさんにはわからない。（黒岩、岩田編　122-123）

＜ポイント解説＞

アメリカとイギリスの移民に対する態度の違いというのは面白い。アメリカは元来が移民社会であり、正統のアメリカ人というものの定義があいまいな国だから、逆に同化の圧力が強くなるのだろうか。引用に出てくるゴードンさんは実在のイギリス人で、このように悩みを抱えながら、この界隈も住みにくくなってきたので、そろそろ田舎に引っ越そうかと考えている。アメリカのように意識して国民性を作り出さなければ、イギリスがイギリスではなくなってしまうという不安がぬぐい去れないのである。

＜引用２＞　英語史概略――多民族国家の起源

実はイギリスの多民族性は近年になってはじまったことではなく、そもそもイギリスはその歴史のはじめから民族的に多様な国であり、とりわけ古い時代のブリテン島の歴史は民族抗争の歴史であったといっても過言ではない。イギリスを単純にアングロサクソンの国と考えることは、むしろ誤ったイギリス観であると言ってよい。

ブリテン島の先住民族とも言うべき人々は、シーザーの『ガリア戦記』にも登場するブリトン人であった。ブリトン人はローマ人からはブリトネスと呼ばれており、このことから彼らの住む島、現在のブリテン島はブリタニアと呼ばれていた。ブリトン人は広くヨーロッパに定住していたとされるケルト系の民族であり、後にはフランスのブルターニュ半島にもわかれて移り住んだ。現在でも、ブルターニュ地方から、民族的に同一のウェールズ地方へと玉ねぎを売りに来る農民の姿を見ることができ、売り手のブルターニュの農夫と買い手のウェールズの住民の間では互いにことばが通じるのである。すなわちフランスのブルターニュ地方のことばであるブリタニー語も、ウェールズに残るキムリ語（ウェールズ語）も、ケルト系言語のうちのブリタニック系言語に属する互いによく似た言語なのだ。現代に残ることばの分布が、民族移動の歴史を示しているのである。

ブリトン族のイギリスは紀元前後からローマに支配されていたが、やがて五世紀になるとゲルマン民族の大移動が始まり、ローマ人はブリテン島から引き上げ、かわって大陸からゲルマン民族が来寇してきた。イギリスにやってきたゲルマン民族はジュート族、サクソン族、アングル族の三部族で、ジュート族は南東部のケント州一帯に、サクソン族は主として南海岸一帯に、そしてアングル族はブリテン島の中央部に定住し、先住民族のブリトン人は西へ追いやられていった。三部族のうちアングル族はもっとも大きな勢力を持ち、彼らの部族名アングル（Angles）がイングランド（England）あるいはイングリッシュ（English）という呼称の由来となった。こうしてイギリスの中心部はゲルマン民族の住むところとなったが、地名には古いケルトのことばに由来するものが残されている。シェイクスピアの故郷、ストラットフォード・アポン・エイボン（Stratford-upon-Avon）は「エイボン川沿いのストラットフォード」という意味であるが、実は“Avon”は「川」を意味する古いケルトのことばなのである。またテムズ川の“Themes”も「黒ずんだ色の川」を意味するケルトのことばである。

やがて八世紀から九世紀になると、北方系のゲルマン民族デーン人がスカンジナヴィア半島から来寇して、イギリスの村を襲い始めた。いわゆるヴァイキングと呼ばれる人々である。彼らはやがてイギリスの各地に定住を始めるが、サクソン族のアルフレッド大王によって、その侵入は食いとめられた。しかしながらイギリスの北東半分ほどは彼等デーン人の支配地域となり、デーンロー地域と呼ばれることとなった。彼らもまたその地名にその支配の痕跡を残しており、たとえばラグビー（Rugby）やホイットビー（Whitby）などといった町の名前の語尾-by は農場を意味するヴァイキングのことばなのである。

ここまでの歴史を見ても、ケルト系のブリトン人、ゲルマン系のジュート人、サクソン人、アングル人、そして北方ゲルマン系のデーン人といった様々な民族が、ブリテン島に到来しては抗争を繰り返してきた。とりわけケルト系の民族はゲルマン系の民族とは文化も異なり、現在に至ってもバグパイプやキルトやウィスキー、それに独特の音楽や踊りなどに象徴されるように文化的な独自性を維持している。ケルト系の人々は、20 世紀の初頭までスコットランドのハイランド地方やヘブリディーズ諸島、ウェールズやコーンウォール地方などにおいて独自の文化はもちろんのこと独自の言語をも使用して、アングロサクソン系の人々とは異なる暮らしを送っていた。しかしながら現在では、その文化的独自性は維持

しているものの、言語に関していえば徐々に英語を中心とした暮らしに移っている。それでもウェールズを旅行してみると道路標識などがウェールズ語と英語の二言語併記になっており、他民族国家イギリスを実感できるはずである。（近藤、細川編　18-21）

＜ポイント解説＞

この後 11 世紀初頭にノルマン人（北方ゲルマン系民族で、フランスに侵入し定住した）に侵略され、以後しばらくはフランス語が公用語として使われる時期が続いた。

英語の基本語彙はアングロサクソン系の言葉だが、ケルトやヴァイキング由来の言葉も数多くある。またケルト系のゲール語やウェールズ語もいまだ話されているが、年々英語に押されて少数派になってきている。そのため、歴史のある言語を保護しようとする運動もしばしば繰り返されてきた。多くの場合、言語の保護運動は対イングランドの民族独立運動と結びつく。

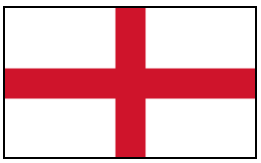
ウェールズのとある駅の駅名表示

＜引用３＞　「連合」王国

（……）イギリス本土であるブリテン島には三つの国が存在している。つまりイングランド、スコットランド、ウェールズである。この三つの国々はサッカーのワールドカップやラグビーの六カ国対抗選手権（Six Nations' Championship）にはそれぞれ独立した国として参加している。従って、たとえばイングランド対スコットランドの試合は国際試合なのである。

しかしながら、それぞれに独立した国と言ってもその独立の度合いや形は様々で、たとえばスコットランドなどは独自性も強く、スコットランド銀行が自国のポンド通貨を発行しているほどである。そこでおもしろいのは、イングランドの通貨であるポンド、正確にはスターリング・ポンドを持ってスコットランドへ行くときである。スターリング・ポンドは国際通貨であるので、スコットランドでも店先で受け取ってくれるが、逆にスコットランドでおつりにもらったポンド紙幣をイングランドに持って帰って使おうとすると、銀行で替えてくるようにと言われてしまう。つまりスコットランドで流通しているポンドは、同じポンドであっても紙幣の絵柄もイングランドで発行されたものとは違って、国際通貨ではないのである。

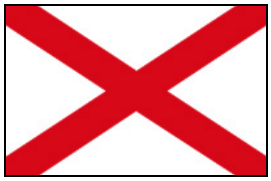
先にあげたイギリスを構成する四つの国々はまた、それぞれの国を象徴する独自の国旗も持っている。日本で開かれたサッカーのワールドカップの際に、イングランドのベッカム選手を応援するのに白地に赤い十字架の旗で応援していた光景をご記憶の方も多いと思う。あの旗はイングランドの守護聖人である聖ジョージの旗であり、いわばイングランドの国旗である。同じようにスコットランドの旗は青地に白い対角線の聖アンドルーズの旗であり、北アイルランドは白地に赤い対角線の聖パトリックの旗、そしてウェール



Flag of England

Flag of Scotland

ズの旗は上が白、下が緑の二色の地に赤い色の龍（レッド・ドラゴン）が描かれた旗である。イギリスの国旗ユニオンジャックとは、実はイングランド、スコットランド、アイルランドの旗を重ね合わせた連合王国旗なのである。イングランドへの併合が早かったせいか、ウェールズのレッド・ドラゴンは連合王国旗には含まれていない。


Cross of Saint Patrick

Union Flag

Flag of Wales

連合王国旗にはそのシンボルをいれてもらっていないウェールズであるが、イギリスの王室では皇太子が必ずプリンス・オブ・ウェールズ、つまり日本式にいえば「ウェールズの宮」とでもいう称号を与えられることになっている。イギリスはもともとブリトン族と呼ばれるケルト系の人々が住む土地であったが、紀元五世紀頃大陸からアングル族、サクソン族と呼ばれるゲルマン系の人々が渡ってきた。その後ブリトン族は西へ西へと追いやられ、イングランドの大部分はアングロサクソン族の支配下に入った。しかしながらウェールズに追いやられたブリトン族はその後も反抗を止めず、一四世紀にエドワード一世がウェールズを征服した際に、彼はカーナボン城において自らの王子をウェールズの人々に与えることを約束して彼らの心を和らげた。以後イギリスの王子は代々プリンス・オブ・ウェールズという称号を与えられることになったのである。こうしてイギリスの国旗にはそのシンボルであるレッド・ドラゴンは入っていないものの、イギリス王室の長男にその名前が受け継がれていることによってウェールズの面目は保たれているというわけである。

私たちが何気なく使っている「イギリス」という呼称は、語源的にはイギリスの一部である「イングランド」を指すことばであるが、現在ではイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドからなる連合王国全体を指す日本語として定着している。しかしながら、私たちがイギリスを旅するときには、これらの国々がそれぞれ独自の文化や歴史を持った別々の国であることを忘れてはならない。（近藤、細川編　13-16）

＜ポイント解説＞

実はこれらの地域をそれぞれ独立した国というと語弊がある。政治的にいえばイングランドに置かれた議会にそれぞれが代表を送るシステムになっている。近年各地域が政治的独立を求めて運動を展開しているが、未だ完全な独立国家と言えるだけの成果はあがっていない。また地域ごとに方向性が異なるので、それぞれの特徴を把握する必要がある。

＜引用４＞　国なのか、それとも地域なのか

今でこそこのような長々しい名称になっているが、歴史的に見ると最初から 4 地域に分かれていたわけではなく、England でも Great Britain でも、また Great Britain and Ireland でもあながちまちがいではない時期があった。つまり、デンマーク王クヌートやノルマンディー公ウィリアムの征服によって封建国家を成立させたイングランドがもともと中心的な位置にあったところに、1536 年にウェールズが、1707 年にスコットランドが、そして 1801 年にアイルランドが併合されてできたものが現在の「イギリ

ス」なのである。（正式には 1922 年に北アイルランドだけがイギリス領になり、1927 年に“Northern”が付け加えられた現在のような国名がイギリス国会で採択された。）なお、2007 年時点の各地域の人口は、イングランド（約 4,975 万人）、スコットランド（約 512 万人）、ウェールズ（約 294 万人）、北アイルランド（約 169 万人）である。

このように、厳密にいえば 4 つの地域は「イギリス」という国の 1 地域にすぎないのであるが、実際にはスコットランドや北アイルランドに郵送する手紙の宛先に、UK を省いてあたかも国名であるかのように Scotland や Northern Ireland と書く人も多い。さらには、現地の人々の間でさえ他の地域を country（田舎ではなく外国という意味で使う）と呼ぶこともあるし、具体的に人々や言語を English、Welsh、Scots（Scottish）、Irish と使い分ける。（佐久間他編著　2-4）

＜ポイント解説＞

というわけなので、やはりこれらの各地域を厳密に独立国家ということはできない。しかし、感情的な部分での認識は異なるだろうし、政治・民族・文化その他の複合的な要因が働いているので、見方を変えれば定義も変わってしまう。それでは地域ごとにどのような特色があるのだろうか。

＜引用５＞　ウェールズ

歴史的に見るとウェールズは 3 地域の中ではもっとも早くイングランドと併合している。紀元元年にローマ軍が侵入してきたときも現在のウェールズはイングランドとともにその支配下に収まっている。加えて隣接するイングランドとの境界線が他の地域よりも長いという地理的条件も重なって、ケルト系民族が多く住むウェールズ、スコットランド、北アイルランドといった周辺地域の中では、ウェールズがイングランドとの関係においては政治的にいちばん近いという印象をわれわれに与える。

これは一面では事実であって、たとえば 1979 年の分権に関する国民投票では、分権反対派が 5 分の 4 と圧勝している。1997 年、ブレア政権下で行われた独自の議会をもつことに関する国民投票では賛成派が反対派をわずかに 0.6%上回ったものの、約 50%という投票率を考えると、積極的に賛成している人はウェールズの人口の 4 分の 1 にも満たないということになる。つまり、ウェールズではスコットランドとは違って、分権に積極的に賛成している人も積極的に反対している人も少ないということである。

考えてみれば、1536 年のイングランドへの併合以来、ウェールズでは独自の国家をもとうとする運動がまったくといっていいほどなかった。統一国家の形成に消極的という点で、ウェールズにはケルト人のもつひとつの特徴が表れている。（佐久間他編著　12）

「プリンス・オブ・ウェールズ」という称号の制定は、ウェールズの言語的文化を政治にうまく利用した例であるが、日常生活においてゲール語系に属するいわゆるウェールズ語が何の迫害も受けずに護られてきたと思うのは間違いである。

たとえばウェールズの小学校では、1870 年制定の教育法によりウェールズ語の使用が禁止され、支配者の言葉である英語が強制された。「マザー・グース」の中には、「タッフィーはウェールズ人、タッフィーはどろぼう／タッフィーはうちに来て牛肉を盗んでいった」という歌がある。“Taffy”を英和辞典で引くと「（軽蔑的な英俗語）ウェールズ人」となっている。また、ウェールズ人という意味の“Welsh”

を動詞として使うと、「借金などを踏み倒す」「約束を破る」などという悪い意味になってしまう。こうした言語的迫害を受けながらも、ウェールズ人は長い歴史を通じて故郷の言葉に愛着を感じ続け、現在ではウェールズ語が公用語として認められ、道路標識やテレビ・ラジオ放送でも使われている。ただし、愛郷心の強い一部の人々は、BBC のローカル放送にウェールズ語の番組が少ないといって抗議することもあるようである。（佐久間他編著　14-15）

＜ポイント解説＞

スターク先生のインタヴューでも触れられているが、ウェールズ語（Welsh）は近年あまり使われなくなる傾向にあり、特に都市部ではその傾向が強い。イギリスにおける言語の問題に関して、ウェールズが話題にされることはほとんどない。それには上の引用のような歴史的経緯が影響を及ぼしている。ただし、プリンス・オブ・ウェールズの由来となった出来事からも分かるように、ウェールズの人々は決して従順にイングランドの支配を許したわけではない。むしろ彼らが手ごわい相手だったからこそ、イングランド王はこうした特別待遇を申し出ることになったのだ。

＜引用６＞　スコットランド

同じケルト民族であるにもかかわらず、スコットランド人はウェールズ人とは対照的に、イングランドに対して常に対抗意識を燃やしてきた。イングランドに併合される 1707 年までは独立した国家として議会があり、独自の政治、法律、教育制度などをもっていたのである。ウェールズや北アイルランドとイングランドの関係が地域間の従属関係という色彩を帯びているのに対し、スコットランドとイングランドの関係はいわば独立国どうしの敵対関係であるという点が特徴的である。そもそもウェールズを征服したエドワード王からして、スコットランドとの戦争にはついに勝つことができなかったのである。

しかも 1707 年の併合はいってみれば海外投資で失敗した借金をイングランドが肩代わりするという形で成り立ったもので、実際には民衆の意志を反映したものではなかっただけに、以後今日にいたるまで独立を求める運動が他のどの地域よりも頻繁にそして強く起こっている。数々の戦争を通じて国家としての独立性を確固として維持してきたスコットランドが、上層階級の人々の無策によってあっという間にイングランドに併合されてしまったわけだから、この併合はスコットランド人にとっては屈辱以外の何物でもなかったのである。しかも併合といっても、小選挙区制を採っているイギリス議会ではわずかに 45 議席しか得られなかったわけだから、実際にはひとつの州になり下がったも同然であった。

こうした歴史的背景があるために、スコットランド人の独立・分権に対する執着には並々ならぬものがあり、現に 1997 年に行われた独立の議会を求める国民投票では、賛成約 74%、反対約 26%（投票率 60%）と、独立を求める側の圧倒的勝利に終わっている。なお、スコットランドがイングランドからの独立を求める背景には、1970 年に発見された北方油田の開発にもとづく強い経済力という自信が根底にあったということも付け加えておきたい。（佐久間他編著 15-16）

＜ポイント解説＞

同じくケルト系であるウェールズと同様に、スコットランドも中央集権的な国家体制に強い反発を抱いている。イギリス人は全般に中央政府を信用しない傾向にあるが、イングランド以外の地域では、特に

それが著しい。スコットランドは20世紀の初めごろには世界で最も豊かな国と見なされたこともあったが、現在では深刻な不況に苦しんでいる。イングランドに対する対抗意識はいまだに根強いが、映画『トレインスポッティング』（*Trainspotting*、1996）でも描かれていたように、失業と犯罪とドラッグの悪循環から抜け出せない若者たちは、イングランドに対する強い劣等感にさいなまれるのである。

＜引用７＞　北アイルランド

アイルランドがウェールズ、スコットランドと決定的に異なるのは、後の 2 者が大勢においてプロテスタントを受け入れていったのに対して、前者は民族の約 70%がカトリックにとどまったという点である。こうした宗教的背景があるために、プロテスタント人口が比較的多い北部アイルランドは結果的にイギリス本国に併合され、逆にカトリックの多いアイルランド共和国ではイギリス本国や北アイルランドに対して敵対姿勢で臨むというやっかいな状況が生まれた。この敵対行為の極端な例が IRA（アイルランド共和国軍）によるラディカルな運動である。（……）

たとえば、1846～48 年の大飢饉におけるイギリス政府の対応策の失敗は多くのアイルランド人に反英感情を植えつけることになるが、アルスター地域だけは造船業や繊維加工業によって経済的な打撃を最小限に食い止めている。アイルランド問題の一大要因である土地問題でも、この地域だけは小作農に対する保障が大きかった。歴史的に優位を保ってきたこうしたプロテスタント系住民にとって、イギリス本国からの分離・独立は特権的地位の喪失を意味していたのである。ともあれ、このアルスター植民以来、アイルランドの独立運動の根底には常にプロテスタント（政治的にはユニオニスト、またはロイヤリスト）とカトリック（政治的にはナショナリスト、またはリパブリカン）という対立が付きまとうことになるのである。

ただし、注意しなければならないのは、北アイルランドでも 20%近くの人はカトリックであるということである。彼らは心情的にはアイルランド統一に賛成でありながら、主に経済的・実利的安定性という理由からイギリス国民に留まっている。（佐久間他編著　18-19）

＜ポイント解説＞

北アイルランドについては、WebCT 上の過去資料も参照のこと。北アイルランドについて考える際に、宗教的対立が大きなキーワードであることは間違いない。もともとはアイルランドの守護聖人ともなってる聖パトリックらの伝道活動によって、イギリスはキリスト教の国となった。その後ヘンリー八世の時代に英国国教会が成立し、アイルランドに対する宗教的迫害が始まることになる。

＜引用８＞　ヘンリー八世と英国国教会

イギリスでは六世紀に入って、北からアイルランド系のキリスト教が、また南からはベネディクト派の修道士アウグスティヌスによってローマ・カトリックが広められていたが、664 年にホイットビーで開かれた宗教会議によって、南から入ってきたカトリックが公的な宗教となっていた。その後カトリックの聖職者たちの腐敗と堕落に対する批判が起こり、一四世紀にウィクリフが最初に宗教改革を試みたがこれは失敗に終わった。やがてヘンリー八世（1491～1549）の時代になると、イギリスは本格的に宗教

改革の嵐に巻き込まれることになる。

　ヘンリー八世当時のイギリスでは、国土の三分の一近くがローマ教皇の配下のカトリック教会のものであり、いわば国土の三分の一が外国勢力に支配されるという状況になっていた。こうした状況の中で、ドイツではルターが宗教改革を説き、その影響はイギリスにも伝わってきた。当時のイギリスは、スペインやフランスなどの強国と比べるとむしろ二番手の国であり、ヘンリー八世の兄アーサーは、スペイン皇女キャサリンと政略的な結婚をしていた。しかしアーサーは体が弱く、若くしてこの世を去り、寡婦となったキャサリンはアーサーの弟ヘンリー八世と再び政略的な結婚をした。キャサリンとヘンリーの間には数名の子どもが生まれたが、メアリーを除いて全員が死亡してしまい、男性の世継を得たいと考えていたヘンリーは、聖書のレビ記の一節「人がもし、自分の兄弟の妻をめとるなら、それは忌まわしいことだ。彼はその兄弟をはずかしめた。彼らは子のないものとなる（レビ記 20 章 21 節）」を根拠に結婚の無効をローマ教皇に訴え出た。しかしながら、当時のローマはキャサリンの甥カールの制圧下にあり、教皇クレメンス七世はヘンリー八世に承諾を与えることはなかった。1533 年、ヘンリーは侍女アン・ブーリンとひそかに結婚し、カンタベリーの大司教クラマンに法廷を開かせて、キャサリンとの結婚は無効であり、アンとの結婚が有効であるとの判決を出させ、1534 年には国王至上法によって国王を「イギリス国教会の地上唯一最高の首長」と規定した。ここに、ローマ教会からの分離独立が行われたのである。（近藤、細川編　51-52）

＜ポイント解説＞

以上がイギリスにプロテスタンティズムが興った経緯であり、国教会創設の舞台裏である。アン・ブーリンの側から見たこの出来事を映画化したのが、2008 年の『ブーリン家の姉妹』（*The Other Boleyn Girl*）である。またこの時にヘンリー八世がローマ教皇に送った手紙のことが最近ニュースになっていた。
（http://video.msn.com/?mkt=ja-jp&vid=c99b3bd1-3c6f-42a0-a878-530c4ff98c98&playlist=videoByTag:tag:JAJPnews_JAJPapnewsgeneral%20:ns:MSNVideo_Top_Cat:mk:ja-jp:sf:ActiveStartDate:vs:0&from=JAJP_ap&tab=m1201065085382&fg=jphpi）